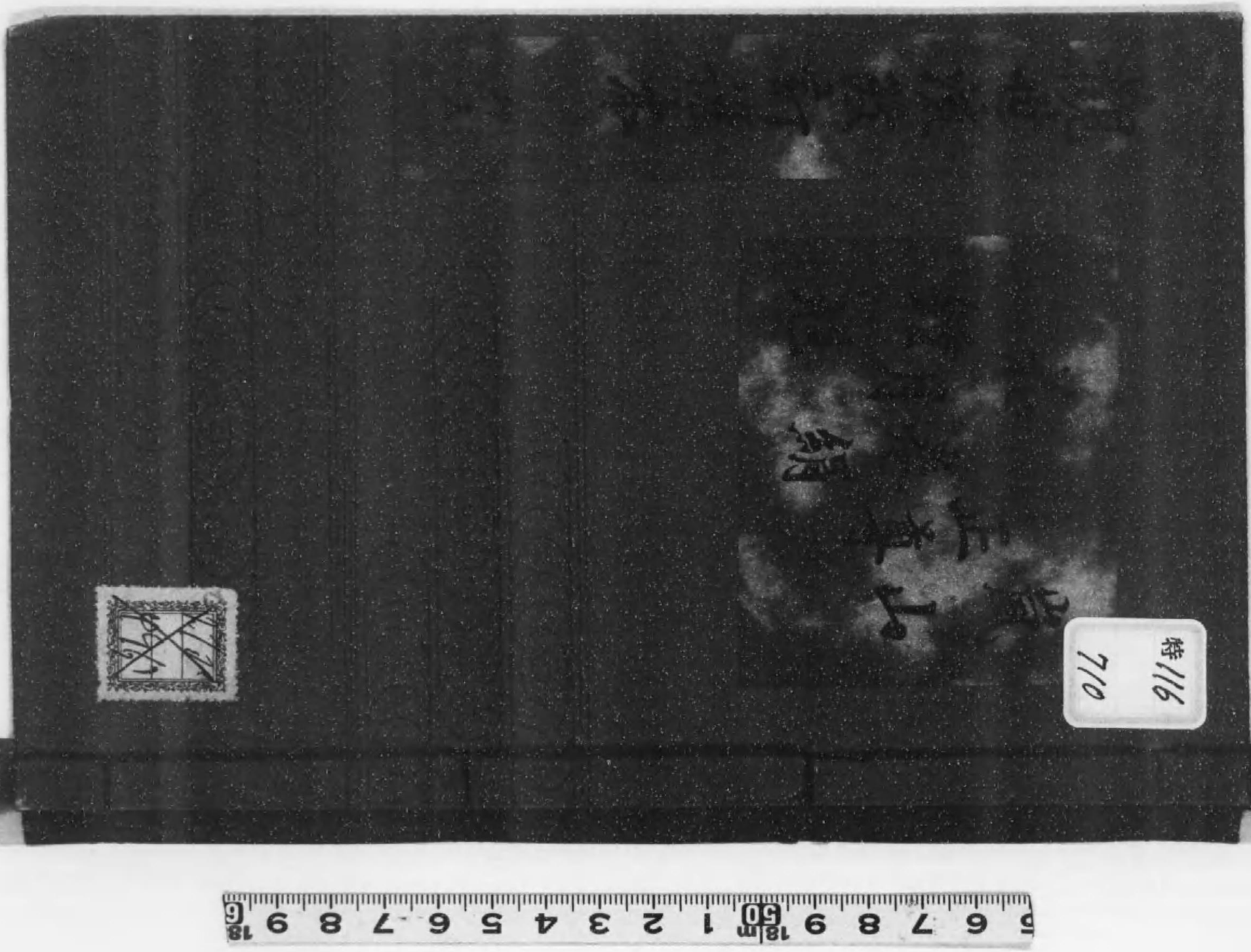


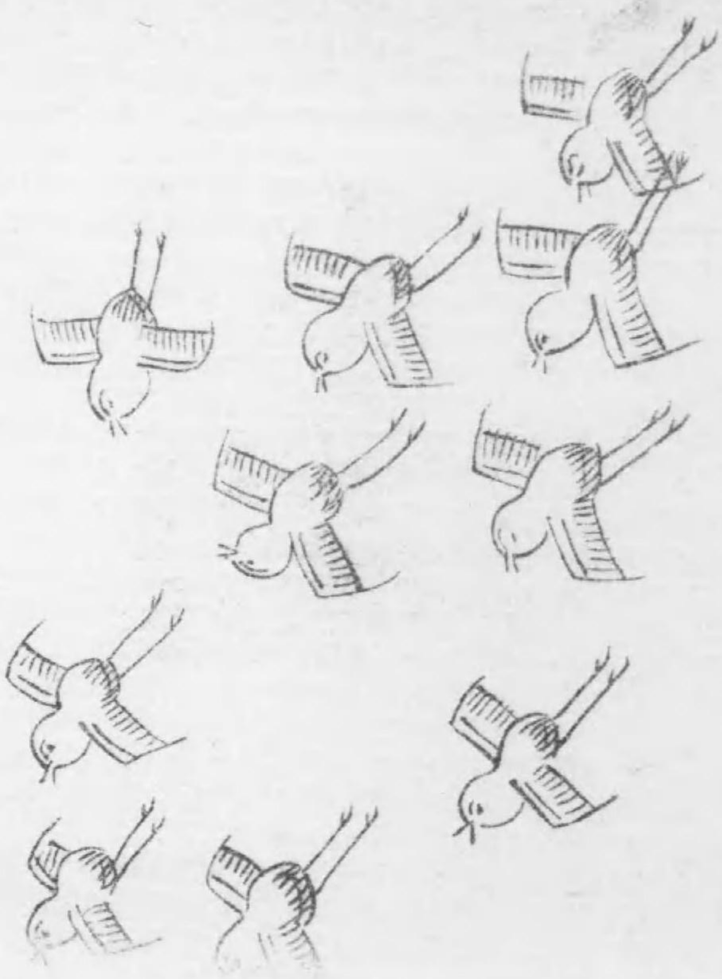
特116
710

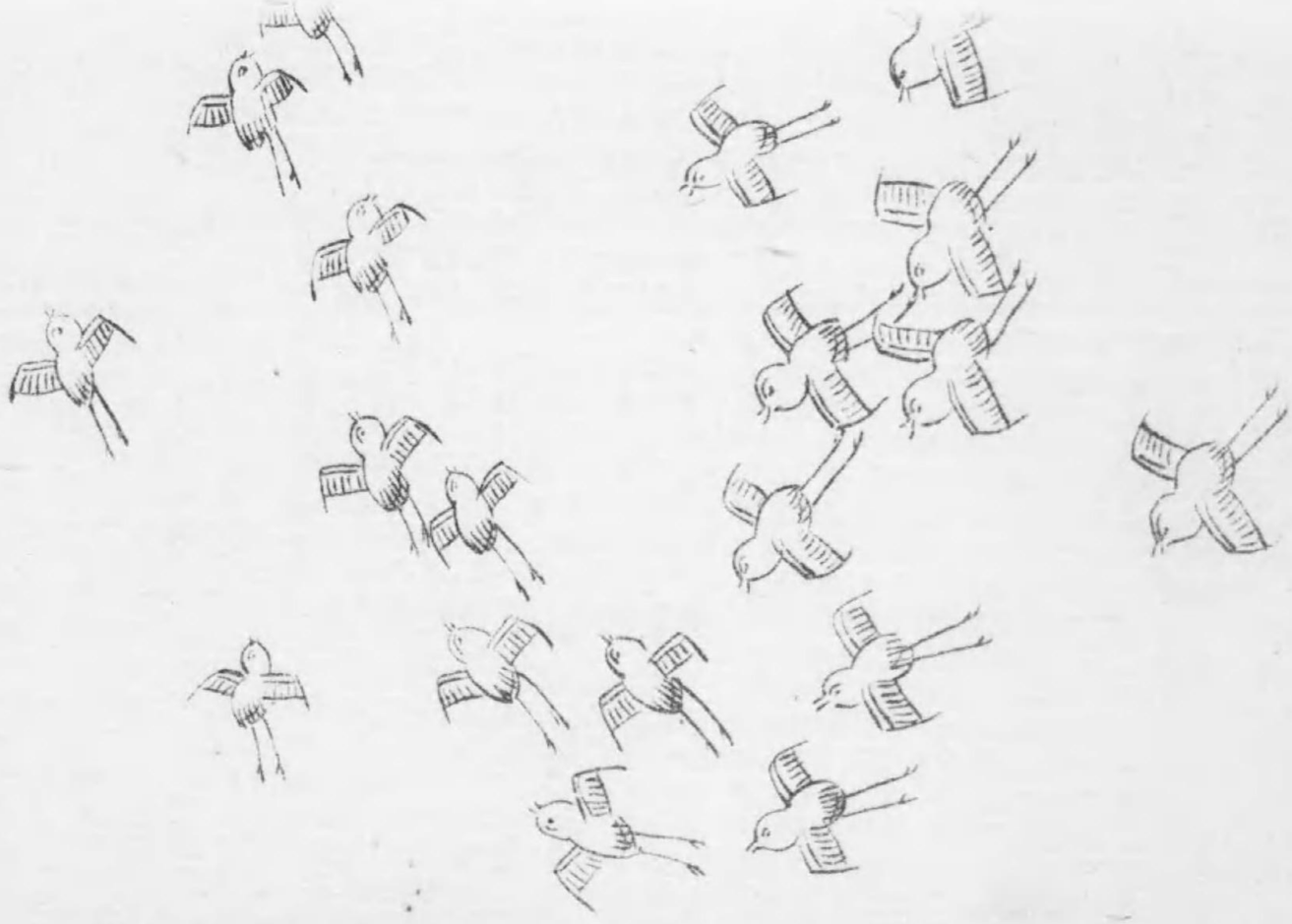
觀世流改訂謠本

外三

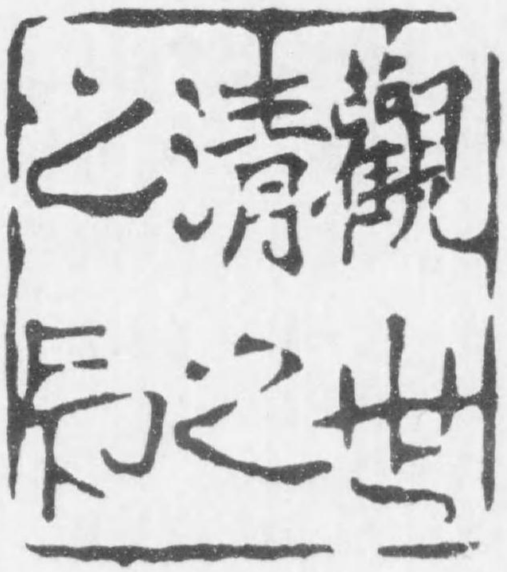
嵐山
正尊
卷絹
花月
鍾馗

特116
710





特116
710



大正
10629
内交

文學博士

明治四十年

井上頼圀 本文監修
丸岡桂 本文訂正
観世清之 節附訂正

大正五年

丸岡桂 解説并補訂
山崎楽堂 拍子附訂正
観世流改訂版刊行會 節附様式統一

大正十年

山崎楽堂 拍子附再訂正

嵐山

解題 勅使嵐山に吉野より移し植ゑたる櫻を見に行きて、櫻花を守る藏王権現、木守の神、勝手の神の霊験を拝することを作れり。能作者注文、及び二百十番謡目録に金春禅鳳の作と傳ふ。東田口張楽記に永正二年四月東田口勧進猿楽（金春）の初日に演せられたること見ゆ。

謡ひ方梗概 脇能中にても颯爽たる趣あるものなり。賀茂、養老などに類す。**前**は老翁なれば少し抑へて静に謡ふべきも、あまり位を重く取るを好まず。**一聲**は高からぬやう物寂びて節を大きく扱ひ、**サシ**は聲を張りと、運びをさらりと謡ひ、**下歌**は少し運びありて謡ふ。返しの一句はツレのみに謡はせてシテ謡はず。**ワキとの問答**は落着きて心静に言ひ、「げに頼もしや」云々の**連吟**はさらりめに謡ふべし。**シテ**と掛合も急らぬやう心にて殺々と張り承け流す。**ツレ**前は大方のツレとかはらず。後は脇能物の天女（實は木守勝手）なれば、精力こに」を朗かに謡ふ。後ツレ素謡にては一人にて宜し。**ワキ**健やかにさらりめに扱ふ心持を胸に置き、「いろ〳〵の」を長閑に、「青根が峯こき立て」以下、前と少し更へて聊か進む心に扱ひ、謡ハ止めを大事に鎮めて納むべし。後の「三吉野の」より「竜山も見えたり」までは滑り拍子と稔し、太鼓あるものなれば、続いて典に来る心にて豊かに晴やかなる〻くし、「第代と」よりどつしりと、「神楽の数」云々は来つて飛勢よく、「ふしぎや」以下ノリを外してさらりと扱ふべし。「和光利物の御姿」は大きく健やかに、**シテとの掛合**は嗜りと地みなく、幸りも引き続き爽やかにして祝言の心を旨と謡ひ納む。

地 初の**下歌**「花はよも散らじ」は更へて聊か緩やかに出で、「笙の岩屋の」の**上歌**は引き流し、「ふしぎや」以下、前と少し更へて聊か進む心に扱ひ、謡ハ止めを大事に鎮めて納むべし。後の「三吉野の」より「竜山も見えたり」までは滑り拍子と稔し、太鼓あるものなれば、続いて典に来る心にて豊かに晴やかなる〻くし、「第代と」よりどつしりと、「神楽の数」云々は来つて飛勢よく、「ふしぎや」以下ノリを外してさらりと扱ふべし。「和光利物の御姿」は大きく健やかに、**シテとの掛合**は嗜りと地みなく、幸りも引き続き爽やかにして祝言の心を旨と謡ひ納む。

辭解 **吉野の花の** 後嵯峨上皇建長年中嵯峨檀林寺の廃墟に竜山殿を造営し、後ひし時天和吉野山より櫻樹をこゝに移植せしめ給ふ。妖曲は續古今集に「竜山の仙洞に吉野山の櫻をあまた移し植ゑ侍りしが、花の咲けるを見て」太上天皇（後嵯峨）と詞書して「春毎に思ひやられし三吉野の花はけふこそ宿に咲きけれ」とあるを取りしなり。**嵐の山** 嵐山をあめていふ。嵐山は京都の西、葛野郡にあり。竜山の仙洞の對岸なるより、後世嵐山の櫻は皆吉野山より移植したるものと傳へられたるなり。**當今** 當代今上の意。其時元禄以前の謡本には六田流より吉野山の東南を登れば銅鳥居まで三十町程の地、一望皆「一條院」とあり。**千本の櫻** 皆櫻花にして一目千本の称あり。吉野の櫻の中にても特に展望の艶

麓を以て宣傳せらる、所なり。**遠方十里** 遠き詞なり。もと遠方かたち十里とありて、単に遠く隔りたる意なりしを、博へ強りたるには誤るか。同流岩船にもあり。**宣旨** みことのり。**げにも嵐** 云々 故移し在るたる病ならずしては、妖の如き名花は亦都にあらずといふを嵐の山にかく。**今そ三吉野の** 云々 今ぞ見るといふを三吉野に掛く 三吉野の「三」は美称にして単に吉野といふに同じ。以下、古今集の序に「吉野山の桜は人麻呂が心には雲かとのみなん覚えける」とあるを引く。**よそめになれば** 云々 遠離れて見れば一層美しき眺なりとの意。人麻呂が遠く見て雲と思ひたると、今嵐山へ移したるとを兼ねていふ。以下の文、元禄以前の諸本には「猶一もに妙なる花の」云々。**花守の** 云々 咲れて花守の住むよりに云ひつぐ。花守は花を守る人。**雪も上なき** 云々 雪を凌ぐといふこともありてこゝには晴に吉野の蔵王権現が妖花を守れる意と手。雪は空のものながら必ずしも花の雪の上の無きものには非れども、嘆き掬ひたる病花の雪き意。**千本に咲ける** 数々の桜の一時に咲ける意。千本の桜の名に寄せたり。は上も無き眺望なりとなり。「上無き」は比類無き意。

春も久しき 千本の名に因みて春も千代なる心ちする意。**名におふ** 有名なる。**後の世までの** 云々 桜花の後世まで名勝として傳るべき意。

との意、実は作者が後世より往古を顧みて作れるより妖詞を成せるなり。**御影山** 君の恵の御産を御産山に譬へ山の動かざる如く安らかなる意にて続まる御代といふ。御産山は上殿山の麓、其他にもあれど、こゝはそれらの山をさすにあらで神の恩澤を蒙る山といふ程の意なり。**九重** 帝都。**内外に通ふ** 云々 帝都より嵐山に花見しさをいへり。花車は花見の車、輦は牛をつなぐ長き柄。嵐山は都の西なればそこに向ふを車の往き通ふ路にて西に廻ると云ひ、語を転じて西に廻る日、日の傾き伸く(傾り伸く意)雲、雲の嵐、嵐山と云ひつゞく。**戸無瀬に** 云々 嵐山の麓を流る大井川の嵐亀二山峡の激流を古く戸無瀬の瀧といへり。夫木抄に「吹きおろす春の嵐の山風に戸無瀬の瀧の花の白波」。**花の瀧** 瀧川に落花の流るゝを花の瀧に見たてゝいふ。**木守、勝手** 共に吉野山に鎮坐せる神。勝手明神は同産七曲坂の西側八町はかり水分山に在り。水分神社と云ひ、水の配分を司る神として、ミクマリ(水配りの意)の神といひ、転じてミコモリといひ、更に畧してコモリとなり、後世子守、木守、又は籠の字の文字を當つ。こゝには其水守と書くより思ひつきて櫻花を守るため影向すと附會したるなり。**影向** 神霊の来現すること。**さーもこそ** 云々 新千載の歌「さーもこそ厭ふ憂き名の嵐山花のところといかでなりけん」。ワキは妖歌を借りて問ひ返したるなり。**神慮** 神の御心。**神風** 神の力を喩へていふ。**風にも勝手** 風にも打ち勝つ意を勝手に掛く。**青高や** 聲高しと刻する意を嵐にかけていふ。**笙の岩屋** 吉野大峯の國見山にあり。山中岩窟多く、中にも笙の岩屋は日蔵上人行慶僧正の陰栖せし處として聞ゆ。新古今集雑歌に出でたる日蔵上人の歌の詞書に「御嶽の笙のいはやにこもりて詠めるとゝろ」。**實相の花、眞如の月** 実相の実は真実、相は真実、眞如の眞は眞實、如は不変の意にして、實相と眞如とは同一物を二面より見たる詞に過ぎず、共に抽象的に観たる万有の本體の称呼なり。眞如実相は仏教に導かれて衆生が到達せんとする標的にて、吾人の迷妄はこれが為に道破せらるゝ妄より、樹木の無節を破つて朗漫として咲き乱れたる花、夜間の闇黒を破つて皓々として照る月を、実相に、亦眞如に喩へていふ。往生要集に「色即是空故謂之眞如実相」。**茅摘の川** 吉野山中國栖村茅摘の地にて吉野川を呼ふ稱。**大堰川** 又大井川とも書く。嵐山の北を流るゝ川下流を桂川といふ。流るゝ水の多きに掛け清き水源は盡くることあらじと懸る。**庭前の木を切る** 和漢朗詠集の句「春風暗剪庭前樹、夜雨偏穿石上苔」に辞を借る。**妄想の雲** 妄想は虚妄の思念にて眞如の光を蔽ふものなれば、前に眞如を月に喩へたる筆法にて、亦雲に喩ふ。**枝は鳴らさじ** 王充の論衡に「太平之世、五日一風、十日一雨、風不鳴條(枝)」。續後撰集に「我君の千代の御影に櫻花のどけき風は枝も鳴らさじ」などあるを心にたきて偲る。**吳竹の** 「よ」に冠する枕詞。日も暮れと云ひかく。**明日も三吉野** あすも亦見んの意にて云ひ、櫻花の聯想にて雲に續く。**西山** 夕陽残るを掛けて出す。西山は京都の西なる嵐山一帯の総称。**南の方** 吉野山の方をさす。**嵐山あらた** あらの韻を重ぬ。あらたは雪駿顕著の意。**神遊** 神の舞楽。**白雪の** 雪のこもりと続く。白雪は花を形容したる詞。**青根が岸** 北の色青といひかく。吉野山の東嶺にて金峰の北に並ぶ山。**小倉山** 嵯峨嵐山に掛ける小倉山を吉野に掛ける青根が岸になぞらへていふ。**嵯峨の原** 嵐山の対岸。**亀山** 小倉山の南に延きたる麓。**萬代を** 亀の齢は高年といふ説あるより亀の字を受けていふ。北林子に「千歳之亀」云々。**千早ぶる** 神に冠する枕詞。**羅綾** 綾、うすもの。**感應** 心に感ト通ずること。**藏王權現** 役

行者の感得したりといふ金剛藏王菩薩を云ふ。太平記に「藏王權現と申すは、若役優婆塞、賀度利生のために金峯山に一千日籠つて、其身の蓮華を彫り造ひ、地藏菩薩の形にて地より湧出し給ひたりしぞ、優婆塞頭をふつて、未來惡世の衆生を濟度せんとならば、かやうの御形にては叶ふまじきよしを申されければ、則ち伯耆の大山へ飛び来り給ひぬ、其後大勢忿怒の形を顯し、右の御手には三鈷をにぎつて背をいらゝげ、左の御手には五指を以て腰をたさへ給ふ、一睨大にいかつて魔障降伏の相をしめし、両脚たかく低くして天地震動の德を現し給へり」云々。今の金峯山下の金峯神社はもと藏王堂金剛王寺と稱し權現を祀り、中世以降修驗道の靈場として大なり。

本覺の都 本覺とは衆生が本來具有する引の覺證の義にて法性眞如の妙理をいふ。本覺の都を出ずしては眞法性眞如の本地より垂迹化現してとの意。**分段同居** 分段は分段生死の身の意。六道に輪廻する衆生は其業力によりて分々段々の果報を受け長短大小壽夭の別あるをいふ。同居は凡聖同居土の略にて凡夫も聖者も同居するをいふ。即ち娑婆世界は業力により分々段々の果報を受けたる衆生の一切同居せる塵界なるに、神は猶德光を和げて其塵に交はり給ふ。分段同居の塵に交り、一足をあげ、一足をさげたる姿をいふ。**金胎両部の** 云々 金胎両部を具有せる藏王權現の一足をあげ、一足をさげたる姿をいふ。金胎両部とは金剛界と胎藏界の両部。此両部は眞言密教の根本教理、即ち胎藏界は理平等門、金剛界は智差別門にして、一法の表裏なれば、一塵一法にも此両部を具有すとなすなり。一足をひつさげといふに別淵天地經濟の德を現せる意を含む。**苦海の煩惱** 苦海は苦の多く除脩なき人間界を海に譬へたる語。煩惱は心身を惱乱する情慾。**悪魔降伏** 義事の降實をなすりて生死界に輪廻する有情。**青蓮のまなこ** 青蓮華は印度にある蓮の一種。其華長くして廣く、青白分明にして大人の眼目の相あり。故に取りて佛の眼に譬ふ。法華經に「是菩薩目如廣大青蓮華葉」。**同體異名** 子守勝手の神と藏王の神と名は異なれど一體分身なりとの意。天禄以前の諸本には「一體分身同體異名」。**金の峯** 金峯山をいふ。此嵐山も宛然金峯山の如しとなり。金をうけて光も輝くと懸く。

脇能

嵐山

三月

後ツレ 勝手神
シテ 木守神（前ハ姫）
ワキ 藏王權現（前ハ尉）
敕使

ワキ次第上ツヨク

吉野の花の種。吉野の花の
種とり。嵐の山よ忘れん 抑これい
當今よ仕へ奉る臣下なり。さても和州
吉野の千本の櫻ハ。聞しめし及ばれ
たる名花なれども。遠方十里の外なれば。
花見の吉幸如何 給ひ給ふ。さるよりの

千本の櫻を嵐山より移しおかれて以来。此春の花を見て来れその宣旨を被り。唯今嵐山へと急ぎは道行上(三人)都より。げよも嵐の山櫻。げよも嵐の山櫻。千本の種はそれぞとて。尋ねて今ぞ三吉野の花は雲かと詠めける。其歌人のおごりぞとよそめよあれば猶しもの。

眺めあるげしきかな眺めあるげしきという口平句なる。急ぎは程よ。これはや嵐山よ著きて。心静かに花を眺めうずるそれは真ノ一声花守の住むや嵐の山櫻。雲も上なき。猶かな。千本咲ける種なれや。春も久しき氣色かな。これこの嵐山の花を守る。夫婦の者とそいなり。

●小謡

それ遠方十里の外なれば。花見の古幸ちかきまことよ。吉野の山櫻。千本の花の種そうて。此嵐山よ植置おかれ。後の世までの例とかや。これそも君の恵かな　打切　げによ頼もしや古影山治まる世代の春の空　上歌　さも妙なれや九重の。さも妙なれや九重の内外よ通

ふ花車。轅も西よめぐる日の影ゆく雲の嵐山。　打切　無瀬よ落つる白波も。散るかと見ゆる花の瀧。盛久しき氣色かな。盛久しき氣色かな。　早笛　不思議やなこれなる老人を見れば。花よ向ひ渇仰の氣色見えたり。おことはいかなる人やらん　シテ　さんぬこれは嵐山の花守

よてゝ。又嵐山の千本の櫻ハ。皆神木
もそれ程。花に向ひ湯(カツゴオ)行申ハ　そも(ワキ)
嵐山の千本の櫻の神木たるべき謂ハ
いかに　げに(シテ)ほゝ不審ハ理(コトワリ)。名よあり
吉野の千本の櫻を移しおかれし其
故(カヽル中)人こそ知らねをりくハ。木守勝手(モリカツテ)
の神(ヒト)ともよ。この花に影向(ヨウゴウ)あるものを

げにやさもこそ(カヽル上)獻(ウ)ふ憂(ウ)き名の嵐山。
取り分き花の名所(メイショ)とハ。何とそ定め置
きけるぞ　そもしこそ猶も神慮(シンリヨ)なれ。
名よあり花の奇特(キトク)をも。顯(アラワ)さんその
所恵(メグミ)　げに頼もしや影山(カゲヤマ)。靡(ナビ)き
伏まる三吉野の神風(カミカゼ)あらバおのづから。
名とそ嵐の山(ヤマ)ありも　地下歌中　花(カヽテ)ハよも

●獨吟

散らで。風も勝手未守とて。夫婦の神ハわれぞかし。音たかや嵐山。人よ知らせ給ひそ（打切）。（上歌）

笹の岩屋の松風ハ。實相の花盛。閑くる法の聲立て。今ハ嵐の山櫻。菓摘のリの水清く。眞如の月の澄めるせよ。五濁の濁ありとても。流ハ大堰川

地拍子

神風ふて（モ）

其水上ハよも盡きじ。いざく花を守らよ。いざく花を守らよ。春の風ハ空よ滿ちて。春の風ハ空よ滿ちて。庭前の木を切るとも神風ふて吹きまくべきを思ひの雲も晴れぬべし。千本の山櫻長閑けき嵐の山風ハ。吹くとも枝ハおらさじ。此日もまでよ呉竹の。

夜の間を待たせ給へ。明日も三吉
野の山櫻。立ちくる雲のうち乗りて。
夕陽残る西山や。南の方へ行きよけり
南の方へ行きよけり。　来序中入

地拍子
三吉野の　下端
打上ヤ

三吉野の。三吉野の。千本の花の種
植ゑて。嵐山あらたなる神遊でめで
たきとの神遊でめでたき　後ツレ二人上ニ
いろ

地拍子
いろいろの

いろの　地
いろくの。花とそまがれ白
雪の。木守勝手の。恵あれや松の色
後ツレ二人中
青根ヶ峯とよ　地
青根ヶ峯とよ。小倉
山も見えたり。向ひの嵯峨の原。下の大
堰川の。岩根よ波かくる亀山も見え
たり　上ロ次ノ文ノ三ノ文ノ文
萬代と。萬代と。囃せ囃せ神遊。
地上最
千早ぶる　天女ノ舞　打上打返
神楽の鼓聲澄みて。
打上打返

地拍子
萬代と

神楽の鼓聲澄みて。羅綾の袂をひるがへし。鈴も舞樂の秘曲も度重なりて。感應肝に銘ぜるをりから。不思議や南の方より吹きくる風の。異香薫じて瑞雲たなびき。金色の光輝きわたるハ。藏王權現の來現かや

●仕舞早笛●打上打返

和光利物の御姿。和光利物の御姿

後シテ

われ本覺の。都を出でて。分段同居の塵に交はり。金胎兩部の一見を

ひつさげ

惡業の衆生の苦患を助け

地

さて又虛空に手をあげて

地上

忽ち苦海の煩惱を拂ひ

惡魔降伏の青蓮のまなゝこに。光明を放つて。國土を照し。衆生を守る。誓を

顕。本宮勝手。蔵王権現同體異名の姿を見せて。おのく嵐の山よ攀ぢのぼり。花よ戯れ捕よ分けて。さるがらこも。金の峯の。光も輝く千本の櫻。光も輝く千本の櫻の。榮ゆく春ことそ。久しけれ。

正尊

解題

土佐坊正尊（明和本に限りて最後）義朝の意を受けて京に上り、義経の邸を襲ひて反つて敗れたることを作れり。曲名を正存とも書き、別名を土佐坊、土佐正存ともいふ。能本作者廷文、及び二百十番謡目録に孫次郎作とあり。言継卿記に天文廿三年三月土佐正存上演のこと見ゆ。

能之変式

起請文を後み上ぐる一章は本来はワキの謡ふべきものなれど、古来書き習物とせられたるより、特に起請文の小書を附してシテ一人にて謡ふを普通の例とせり。此時は本文の欄外に記せる如く前後の文を変ふ。

謡ひ方梗概

武事を仕組みたら現在物なれば、後々の志気を奮んじ、通じて勇動に謡ふ。**正尊** 前は飽くまでも鋒芒を蔵みて時機の機謀を弄すち怪傑の面目を写し、凜乎として落着あらべし。先づ初の辨慶との問答は隠して隠やかに事無げなちべく、調合にたちても餘り強めず、餘義無き躰につくられ、「主佐坊も」と大きく地に渡す。義経との問答は前と趣を変へて一躰に丁寧たるなり。「あら勿躰なや」云ふは辨慶の調へかけて出で、以下前よりも確りと、長く句意を謡ひ表すに力を。「唯今御目に懸くべしと」は稍強々と地に無からべし、後は大きく堂々と物々しく扱ひ勢を十分にして然も餘りに忘がぬやう確りと謡ふ。「抑られは」云ふは徒やかたすらりと運び、其気を承けて次の詞に移りがつーりと巡のゆるぎ無く、「とう〳〵」云ふをかくつて大きく扱ふ。**義経** 通して確りと扱ひ威と品とを有つべきなるべし。**静** 子方の役なれば其心にてさらりと扱ふ。**姉和、郎等** 勢よくさらりと謡ふ。**辨慶** ワキとしては往重く、通じて確りと雄大なるべし。**名告** 以下大きやかに確りと言ひ、正尊との問答は對者を後さる程度にて油断なく確りと心がく。**義経**の詞は凡て丁寧なるがやがて」云ふとさてらりめに落ひ、**地** 初の上歌は里謡ひ好く謡ふ。「当座の席を通れんと」云ふは初句を大きく、通ーとり運ぶ。起請文の後「本より」云ふは地みなく確りと出で、「なりふし」の次変りよく調子なるも柔かーに。「白雲かーる山となるまで」は稍寛りと帽ぶかた、「変らぬ契を」云ふは素通に附け、「よくく申せと」とり引き立てーさらりと謡ふ。後の「義経これを召されつ」云ふは勢を籠めて確りと、「身方の勢は」云ふは勢ひてさらりと、「長刀かがて取り直ー」の初句は確りと出で、運ーとり健やかにさらりとなり、「正尊これを」とり別に位を定めて大来りに謡ひ捨れ、「しく謡ひ進みて、終の句にそ鎮めて納む。

起請文

大鼻に於て「安宅の勧進帳と類似のものなり。「敬つて白す」は勧進帳の「もれつら〳〵」の如

く中音にて静に出、「起請文の事」の終を呂音に締め、「上は梵天」より東を更へ、合方に合せて猶悠々と強引起し、微細なる節の抑揚を帯りなく謡ひこなす。「氏の神」の打切前にて再度腹の「金峯山」の打切まで序の位にとる。打切後素を更へて大きく破の位に入り、「氏の神」の打切前にて再度腹の「金峯山」より急の位に進みて堂々と拍を張つて謡ふ。序破急の移動の具立たぬやうに心し、通じてさらさらと重々しからぬ姿なるべし。

辭解

西塔 義経記に鞍馬寺を比叡山延暦寺の西塔に在りしこと記せるに基き、他の謡曲にも西塔の武蔵と作れるよりこゝにもしかいふ。**武蔵坊弁慶** 義経の郎等。源平盛衰記、平家物語、義経記等に一騎当千の侍大将として挙げたれども妻妾説には僅に二箇所に其名を出せるのみにて他謡曲に作らるゝ如く義経郎等中の主座なりし者とは思はれず。**判官** 源義経を指す。判官は検非違使の尉を呼び慣し稱。**鎌倉殿** 頼朝を指す。永三年。**木曾義仲** 云々 義仲は源義賢の第二子。頼朝、義経等の従兄なり。東津の原に戦死せしことは慈円、平氏の一門壇浦に亡びし時をさす。**一天を鎮め** 云々 天下を統一したる意。一天、四海、数字なる文の後とかゝる。平家物語の調なり。**渡邊** 今の大阪市の天満天神両橋附近。**土佐正尊** 宋鑑、源平盛衰記、平家物語等に土佐房昌俊と作れり。斯く傳へたる平家物語異本もあるべし。昌俊は頼朝幕下の勇士にて、平氏討伐の時は範頼の部下に加はり居たり。文治元年頼朝義経不和となるに及び、自ら進んで討伐の任に当らんと請ひ、出発の前、下野国中禅寺を賜はりて京に上り、十月十七日の夜(玉葉、百錬抄)に手勇勝を率ゐて義経の六條室町の邸を襲ひしなり。時に邸内人少かりしも佐藤忠信等の力戦する間に家臣等愛を聞きて帰り来り、源行家も亦来り援けしかば、昌俊遂に敗れて鞍馬に逃れ、後捕はれて六條河原に斬られたり。此曲は主として平家物語に據り、義経記をも参酌して脚色せりと見ゆ。**御諚** 御仰せ。**旅宿候** 御機嫌伺の為の参邸。**宿願** かねてより立てたる神仏への願。**熊野路次** 途中。**違例** 不快。義経記に「路次より風の心ちあり」とある外、他書に見えず。**石にはあらず** 云々 古今集の歌「最上川のぼればくだる稲舟のいなにはあらず此月ばかり」の句を轉倒して用ふ。さすがの土佐坊もいなとも事かなはずの意。稲舟の石と言はんための枕詞。**上れば** 云々 京に上れば生きて鎌倉に下る事はいさ知らずとなり。**あらまーごと** 縁の期しなること。**別の子細** 変りなる事。**御渡り** 義経が都に居ることをさす。**かまへて心に期して** 宇治瀬田の橋 宇治橋は山城の宇治川に架けたる橋にて大和に通ずる要路。瀬田の橋は近江瀬田川に架けたる橋にて東海道より京に上る要路なり。橋を引きとは橋板を引き離す事。**和僧** 僧を呼びかくる詞。出家といふに同じ。**此法師** 雑魔自らをさす。**手なみ** 腕前。**君** 義経をさす。**武略の式略に長けたるの意。しの云ひさがなき事** 物事に不詳の事。**鎌倉へも** 云々 文治元年五月義経の家臣父子を護衛して鎌倉に入らんとせし時、頼朝許さずして腰越より退去を迫りしたるをいふ。**緩怠** ゆるがせにせる心掛けの意。**當座の席文者** 文に巧なる者。**起請文** 神仏を勧請して誓ひを立つる書状。平家物語には「七枚の起請を書き或は焼いて飲み、或は社の寶殿にゆ」云々と見ゆ。文言は何の書にも載せざれども、一般の起請文の常型なり。**上は** 天上界にては梵の意。後の下界に対す。**梵天** 梵天王。仏教にて塔婆と食欲との二欲を離れたりとせらる。色界と称する有情の住所のうち、其初住に住する天界の一天王。**帝釋** 色界の下なる欲界の第二の天界即ち忉利天の主。須弥山の頂喜見城に居て他の三十二天を統領すとせらる。**四大天王** 欲界六天の第一の天、即ち忉利天の下住に住する四天王。**閻魔法王** 地獄の總司。**五道の冥官** 冥土の十王の眷属。**泰山府君** 冥土の十王の一。**下界** 北世界。**伊勢天照大神** 伊勢の大神宮に鎮座せる高天原の主神。**伊豆** 伊豆國に鎮座せる三島神社をさす。**箱根** 相模國足柄下郡(今足柄下郡)なる箱根権現をさす。**富士浅間** 駿河國富士郡大宮町(今富士山)なる浅間神社。**熊野三所** 紀伊國牟婁郡(今東牟婁郡)なる熊野三所神社。三所は本宮、新宮、那智。**金峯山** 大和國吉野郡金峯山寺野山)なる蔵王権現。**王城の鎮守** 或は京都近傍に鎮座の神々を通じて云ひ、以下に神名を列す。**稲荷** 山城國紀伊郡稲荷山(後其麓に移す)なる稲荷神社。**祇園** 京都祇園に祭る牛頭天王社(今八坂神社)。**賀茂** 同賀茂郡なる賀茂神社。上(鴨山の麓)下(乱の森)の二社あり。**貴船** 同郡貴船なる貴船神社。**八幡三所** 同郡男山なる男山八幡宮。**松の尾** 同葛野郡松尾山の麓祭神三座なるよう三所といふ。

なる社尾神社。**平野**　同郡大北山村なる平野神社。**神祇**　天神地神。**冥道**　閻魔王の住む冥界をさす。泰山府君、冥道の冥官などと治世に属せり。**氏の神**　祖神又は産土神。**阿鼻**　無間地獄をいふ。八熱地獄中の一にて一劫の間苦を受くるところ無間なりとせらる最悪處。**文治元年九月日**　文治は後鳥羽天皇の御代の年號。平家物語に「九月二十九日に土佐坊都へ上りてのちとなり」とあり。**磯の禪師**　京都にもてはやされたる白拍子。磯と名づく　據りたるなれど、實は其者京は十月に入りてのちたちたつきて平家物語抄に「淀路の者なり所の名なりしと記せども詳ならず。**静**　磯の禪師の女、義經の妾。**白拍子**　歌舞を以て客席に持する當時の遊女。**今様**　平安朝の末より鎌倉時代にかけて盛に行はれたる謠ひ物の一種。**花菖**　舞人の頭にかざす花、其縁語にそかしちと後く。**君が代は**　云々　後拾遺集の歌、君が代は千年に一度置く塵の積りて高山になるまで久しく榮えんとの意。**頼朝**　義經兄弟の契。**隔てぬ心**　義經の頼朝に隔なき心。**よくくゝ申せ**　頼朝へ宜しく言上せよとの意。以上數句、静が歌にして謠めし心なり。**物の具をし**　鎧兜など着附けなさるといふ。**着背長**　腹巻、胴丸などに非る通常の鎧。**御はかせ**　貴人佩用の太刀を敬ひていふ詞。**中門の廊**　大門と寝殿との中間にある門の東西の廊下。**白波と**　云々　白波は盗賊の異称なれば よそ聞きたは盗賊なりと思ふべけれど、深き子細ある祇討ぞとの意を波、浦、わたつみは海の古語。**九郎太夫**　義經は義朝の第九子にして立佞の腎なりしかはかくいふ。**御腹めされよ**　切腹せられよ。**江田の源三、熊井太郎**　共に義經の部等。**寄手**　攻め寄する方の軍勢。**渡りあひ出合ひて戦ふこと。**　**虚起請**　偽りの起請。**好む打物**　愛用する刀剣の類。**器量の人體**　職務向きの人柄。**もの其もの**　事々しく。**こゝ出長刀**　突きこむ長刀。**唐竹割**　漢竹を割るごとく上より下へかけて二つになるをいふ。**宗徒の郎等**　一族の如く頼む家来。**縄うちかけて**　此處にて弟後を擒へたりとなす。能の場面を飾らん爲の作者の創意なり。

四番目ヨリ末

正尊　ショウソン　九月

子方　静御前
後ヅレ　妹和平次光景　同（立衆）土佐坊郎等
ツレ　源義經
シテ　土佐坊正尊
ワキ　武蔵坊辯慶　ツレ（立衆）義經郎等

辯慶　何　これい西塔の武蔵坊辯慶とそいさて
も我ら君判官殿ハ鎌倉殿より大名
十人附け申されてゆくぞも。内ゝ所中
不和よるり給ふよりハ心を合せて一人
づゝ皆下りはてゝいさても去年の霜月
木曽義仲を追討せ（ッキトオ）より此方（コノカタ）度（タビ）ゝ

平家を攻め落し。此春ごろ果てゝゐ。
一天を鎮め四海を澄まし勧賞行を
なべき所よ。渡辺寄りて梶原が逆櫓の
意見を承引し給ひ遺恨よ
より。我が君を讒奏申し。兄弟の仲
中不和よ。なり給ひて。又鎌倉より
土佐坊尊ど申す者。昨日都へ上りて

いる。これは我が君を狙ひ申さんためと
聞しめされ。急ぎ召し連れてまゐれ
との御諚よそは程よ。唯今土佐が旅宿
へと急ぎゐ。いとよ案内申ゐ。判官殿より
使よ武蔵が糸ゝてゐ。正尊ハ此屋
のうちよ居のゝりいか　武蔵殿(正尊)や
おら珍らしや。先づ此方へ居のゝりゐへ

辨慶 承りは。まづ以て所存よりめでたしは。
これは君よりの御使にては。上洛の由
聞しめ及ばれ。何とて御候はゆえ
ぬぞ。鎌倉殿の御意も聞しめされ
たくは間。急いで御参りあれとの御
事にては 正尊 すんば宿願の子細はひて。
熊野参詣の為よふて罷り上りては。

昨日京著仕へども。路次より達例
仕り散々の事にては程よ。今まで遅
なり申しては 辨慶 委細承りは。作は
さる事なれども。唯今御供申せとの
御事にては 正尊 畏ってはへども。今
少し養生を加へ。必ず伺候申はべ
辨慶 やく 所時も早く國の御事をば

伺候申はべ

●小謡

聞しめされたく思しめせば。唯こ所供
申さんと　正尊カ云上　曩非を云ふせぬ武蔵
殿よ　弁慶　さしも剛なる　正尊　土佐坊も
地上歌　●君よあらぬ稲身の。君よあらぬ稲
身の。よれば下る事もいさあらまし
どこも徒よ。ある打切もよや露の身の。
消えて名のみを残さばや消えて名の

みを残さばや。　弁慶仕　いうよ申し上げは。
土佐正尊を召し連れて参りては
義経　此方へと申せ　弁慶　畏つては。とおたく
義経　参られゆへ　いうよ土佐坊殿ら。
さて何の為よりてあるぞ。鎌倉殿
より所文いあるか　正尊　さんぬさたる
所事も密座なくば問所文い参ら

ぎは。詞よ申せそいひ一ハ。都よ別の
子細おくは事。偏よ所渡りは故と思
しめは。かまへて能く守護させ給
へとそ。ぞ諚ひつれ　義経　よもさハ
あらじ。義経討ちよりたる所使と
そ。賢えたれ　弁慶　ぞ諚の如く。大名
どもをさ一上せられはそ。宇治瀬田

の橋をもひきさ。都鄙の騒ぎとなりてハ
あり方なんと思一め。土佐坊上つ
て物詣するやうをそ。ただ知りて討ち
申せとそ。作せ付けられはひつらめ。
和僧よおとそ。此法師。手なみの程を
見まべきなり　弁慶　あら勿體なやたと
ひ人の讒言によより。君とそ。作せ出さ

さてもさまざまよ武略の武藏殿さハ
あるまじきと申されてこそ兄弟の
御中よものこひさがあるき事あるまじ
けれまづ靜まつて事のわけを奉
く問き給へ武藏坊これ御說ましてゆへ
ども何よりて唯今さる御事のハ
べき。聊宿願の事のハ問熊野系詣

義經

の為よ罷り上りてハ　梶原が讒奏
よりより義經を鎌倉へもの入られぬ。
道より追ひ返されし事ハいろよ　正尊　その
事ハいざ御座ハやらん。身よおいてハ
全く緩怠あらざる趣。起請文よ書き
表ち　唯今御目よ懸くべしと
堅歌
當座の席を通れんと。當座の席を通

起請文ノ小書付ノ能ニテハ本文中「」ノ處ヲ欄外細字ノ如ク更ヘ、起請文×印ノ一章ヲシテ一人ニテ讀フ

「ここにきたりて讀みたりけり」

又

「ここにきたりて讀み前ニ於ルて讀みたぐる」

▲▼重習

地拍子

「泰山府君」

地拍子

「富士淺間」

れんそ上佐ハ向うる文者ハて。自筆ハ
これを書きつけ「雜慶」ハとそハ渡し
けれ」

▲敬つて白ハ起請文の事。上ハ
梵天帝釋四大天王閻魔法王五道
の冥官泰山府君。下界の地ハ伊勢
、天照大神を始め奉り伊豆箱根。富士
淺間。熊野三所。金峯山王城の鎮守

習ヒ

氏の神。金く

地拍子

「これあらば」

稲荷祇園賀茂貴船。八幡三所。松の
尾平野。總じて日本國の大小の神祇
冥道請「驚かし」奉る諸ハ氏の神。
金く尊討手ハ罷り上る事なし。
此事偽これあらば。此起請文の。罰四罰の
當り。來世ハ阿鼻ハ隨罪せられん者
なり仍て。起請文此くの如し。

地上ノ人ノ読み上げたり

起請文ノ小書付ノト書キハ本文「し」ノ處ヲ欄外細字ノ如ク更ヘ謠フナリ

白拍子

元年九月廿日尊と。讀み上げたるへ
身の毛もよだちて書いたりけり」
地上
本より虚言とは思へども。文を揮うて
書いたる。器用を感し思ひ。盃を
下さる。とり分け前よ。磯の禪師が
女よ。静と云へる白拍子。今様を謠ひ
つ。お酌よ立ちて花葛。かゝる姿ぞ類

静上
中不合
中ノ舞
あるき。舞の袖 君ゞ代ハ。千代よ
地上
一度。みるちりの 白雲かゝる山と
行上頭三行
ある迄で。山とある迄で山とある迄で
静中
地
変らぬ契を頼む中の 変らぬ契
行二頭行
を頼む中の。隔てぬ心ハ神ぞ知らん
よく〳〵申せと静よ諫められ。土佐坊
昔前を罷り帰れば。君も虚寝所よ。

らせ給へ。おのく退出申しけり。中入

（弁慶行）いろよ申しあげけり。唯今土佐ゞ宿所を見せよ遣はいる所よ。幕の内よハ矢を負ひ弓を張り。兵ども皆物の具をし。唯今打つ立つ。氣色見えて。更よ物詣の氣色ハ見えぬよ。申ハ（義経）もと

より覺悟の前なれバ。何程の事の

あるべきぞと

（弁慶カ）其まゝやゞて虎座を立ち

（静）静ハ著背長まゐらまゐる

（地上歌）義経これを見されつゝ。義経これを見されつゝ。腰刀を取りて静を中門の廊よ出で給ひ。門を開かせ諸共よ。寄せ来る勢を待ち給へ。寄せ来る勢を待ち給へ

（謡曲）白浪とよそよや聞

かんわだづみの。藻き心ハあるものを

其時正尊駒静とて打ち寄せて大音

上げて名のるやう。抑これハ鎌倉殿の

御使土佐坊正尊と我ゞ事なり。九郎

左衛門尉判官殿の。討手の大将給とつ

たり。疾う疾う腹召されよと。大音

上げてぞ呼ばりける

打上諏頭打切

身方の

正尊行

地上歌

勢ハこれを見て。身方の勢ハこれを

見てあの土佐坊を。討ち取らんとわれ

もわれもと進む中ゝ。江田の源三熊井

太郎。渡辺党ハ切つて

出づれば寄手の兵渡りあひ喚めき

叫んで。戦うたり

辨慶行

其時辨慶表よ

進みいらゝ土佐坊確と向けさても書

地柏子
身方の勢ハ

土佐坊を

地柏子
源三熊井太郎

地柏子
辨慶を

小書ヨリカケリ入ル

きつる虚起請の罰を忽ち與へべし。
いざ一太刀で呼ばるれば　妹和　大將討た
せて、かなたへ。なむ打物ひつさげて。
辨慶を目懸けて懸りければ　辨慶　あつ
ぱれ器量の人體かな。さて汝はたそ
と尋ぬれば　妹和　もの其ものよあらね
ども。正尊ぐ内よ名を得たる。陸奥の
國の住人よ。妹和の平次光景なりと。
大音上げてぞ名のりける　辨慶　げにゆ
しくも名のるものかな。さては汝は土佐
ぐ郎等。われよは不足の者なれども
志をば報ぜんと　地上　長刀やうて取り
直し。長刀やうて取り直し。無慙や汝。
手よかけんと。とむ長刀を打ちはらひ。

受け流せば、よそう直し。ちやうと打てば。はつたと合せ。重ねて打つよ。打ちとまれて。何かいたまらん。唐竹割よこつよおつてぞ失せよ。よける。尊これを見るよりも。打込打返。尊これを見るよりも。宗徒の郎等數輩討たせて。ゆり上。高ちで。と馬よりおりこそ乱れのるを。義經

打物そう直し給ひ。きまをあらせぞ戰ひ給へば。静も諸共よ切り拂ひ切り拂ふ。尊高ちでとうきこちけるを。雜慶追つめ戰ひけるぞ。押し並べむずと組みえいやと投げ伏せ大勢取りこめ縄打ち懸けて。荒び勇み。囚人をひつ切せ。門の内よそのひ給よ

巻絹

解題

君霊夢を蒙り絵ひ、国々より千定の春情を三熊野に納めしめ給ひし時、都より納言の男遠に音無の天神に冬梅の咲けるを見、神に歌を手向けがてして甚しく遅参し、其罪にとりて傳められたるが、天神の神霊霊験殿の巫女に乗り移りて此男の歌神風流の心を誇り、其傳を解かしめしことを作れり。二百十番謡目録に観阿弥作とあれども明かならず。

謡ひ方梗概

三輪、龍田　かなどに類し、適にて東高く清楚なる風体なるべきに、これは神がくりのわざにて、其謡段に稍異ち處あるに心を置くべし。**シテ**　品位に過ぎ優美に失せぬやう心し、氣溌み渡る趣にて聊か弱みを含むところあらんこそ。先づ呼掛は大やうに雇りと出で、以下の詞はこせつかぬやうに稍すらりと言ひ、「人倫心なし」を新巧に扱ひ、「解けとこそ」を稍大きく、「解けやな御の乱髪」を柔かにかつて謡ひ地に流す。**ワキ**との間、命は前よりも少く強くもち、「稍も神慮を偽りとや」云くは穏やかにかつて出で、其後を憚りて雇りめた言ひ、「旬はさりせばたれか知らべきと」を前との續き好く承け、「詠みしは疑ひなきものを」と柔をのせてきつぱりと謡ふ。**サシ**は柔を受へてすらりとしたる處を引き立てく扱ひ、クセの**上端**は素直にさらりとあらべし。**視詞**の「謹上再拝」は引に出で、一とまづ謡ひ切り、巫女なれば強きに過ぎぬを度として、稍調子を揚げ、「隆盛殿」以下の**地**との掛合は柔にサシの中音の調子にて謡ふ。「華藏世界」云くはは「きらうと稍調子を揚げ、「隆盛殿」以下の**地**との掛合は柔つて稍ゐ雇りと承け、**ツレ**　風雅の心ある男かれば、常のツレよりは品よく優しきもあらで靭丁寧に扱ふ。**ツレ**　風雅の心ある男かれば、常のツレよりは品よく優しきもあらで靭丁寧に扱ふ渡し好く流ふべし。詞になり「や」と柔附きそ、「冬梅の旬の聞えは」と物静に、「げにこれなる梅ぞ」と更へ、「南無天満天神」を慎まし、「今は懈り申すに及はず」云くはさらりと軽やかに出で、「心も深みてかくばかり」と位を締め、段めて「音無にかつ咲きそ」を「何とて遅なはりたるぞ」とし、やかに歌を吟ずる心なるべし。**ワキ**　教授なれば雇りと勢よく扱ふべく、詞きく言ふ。「何とて遅なはりたるぞ」云くは答むる心なれども、靭かき厳しき程に止めて、下品に流れぬやう心す。「汝一人おろかなるは」は柔をかけて雇りと稍調子を揚げ、「げに汝」云くはツレに言ふ處なれば更へ、「いかに汝」云くはツレに言ふ處さらりと承け、「さあらば祝詞を」云くは「さあらば祝詞を」云くは火一丁寧に言ふ。**地**　初の「解けやな御の」云くは前を承けて厳しくもてなし、「さあらば祝詞を」云くは火一丁寧に言ふ。「本より心直撓方便の業」云くは更へてさらりと附け、「解けやな」を火し大きく謡ふ。「本より心直撓方便の業」云くは更へてさらりと附け、「解けやな」を火し大きく謡ふ。「せ給はで歌人を」を雇り、其後をさらりと、「げに疑ひめ」より掛りめた、「ゆるし給へや」を雇りと止む。**クリ**

は前よりも手堅く、前は大きやかに運びはさらりと扱ひ、サシ以下は淀み無かるべし。クセは稍さらりと出で「天を得れば清く」を確りと少し大きめに扱ひ、「地を得れば」より本の位に戻し、上端後は前よりも軽々しくなからぬやう心しつゝ位を進む。「されば御獄は」云々は前を承けてすらりと、「密厳浄土」も同じ心にて附け、「ありがたや」と稍大きく「不思議や祝詞の」以下を引き立てゝ新に爽やかに謡ひ出で、シテとの掛合にかゝりて気の抜けぬやう承け渡し、「御幣も乱れて」より位を早め頻次にかゝり行き、「いさすつる」の終にて後の其後気を抑へ、十分に鎮めて、乗り移りたる神の離れ行く趣に謡ひ納むべし。

注意すべき謡ひ方

シテの謡「人倫心なし」は始を上音の抑へより出で、「心」の頭を籠めて張り、「ろなし」をサシの三字落しの節かたちにて、それよりは音を低めに、言ひ換ふれは上音と中落しの音との中間ほどの高さに抑へて謡ふ。定家の「ながらへば」と同じ扱ひなり。文祝詞の「謹上再拝」の終は「イ」の音に入廻しと抑への廻しとを續けて謡ふなり。

辭解

當今 當代今上の義。其時の天皇をさす。**あらた** 霊験顕著なること。**霊夢** 神佛の意によりて現ずる夢。夢想。**巻絹** 疋の絹を今の帯地の如く巻きたるもの。**三熊野** 三熊野の三はもと美称なるを後には附會して熊野三山の意とせり。熊野三山は紀伊國東牟婁郡に在る本宮(熊野坐神社)、新宮(熊野速玉神社)及び那智(熊野夫須美神社)の三社をいふ。**紀の路** 紀州を通ずる公道。旅衣着と言ひ掛く。**都の手振** 都の風俗。紀路に志して都を出づれば行く道々はまだ都の風俗と異る程にもあらねども、旅ぞと思ふにつけて何となく心安からずとなり。**王土の命** 王土に住む者の當然受くる命。仲光の謡に「よしや王土に住む習、貴命は誰も遁れぬぞ」といへる類なり。以下、命の重きさを重荷に掛け、肩にかくる身を南の國に掛く。紀伊は都より南なればなり。**千里の濱邊** 熊野街道なる岩代より南部までの海邊の称。千里の名に寄せて聞くだに遠しといふ。**山は苦路の**云々 若生にて険しき山通ひ、名さへも千里といふ遠き濱邊を行く事ぞと思へば、道中も休む暇なく、心も落着く隙なしとなり。**朝しよし** 紀の枕詞。**紀の関** 白馬の関とも称し、古昔、紀伊和泉の境なる雄之山の南麓なる湯屋谷にありし関。**今ぞ始めて**云々 始めて見るを三熊野に掛く。**音無の天神** 熊野本宮の傍なる音無川の邊にあり。史に徴すべきもの無きを以て熊野坐神社社務所に問ひ合せたるに「音無天神は當神社の摂社にして現今も猶祭祀しあり。御祭神は少彦名神に坐す」との返信あり。これにては天神の称如何と思はるゝも暫く當社の所傳に從ふ。**冬梅** まだ冬ながら時ならず開く梅。**匂ひの聞え** 聞えは心に感得する意。本來は耳の感じをいふ詞なれど押し廣めて用ひ慣はしたり。弱法師にも「や、梅の香の聞えけり」。薫き物を聞くといふも同じ言ひ様なり。**思ひ連ね** 和歌を詠じたること。**南無** 梵語、神佛に帰依信頼する詞。**天満天神** 菅公の神號なり。**君に仕へ申さん** こゝには枝謹に従ひ巻絹を奉らんとの意。**おろか** おろそか。物をおちやりにすること。**いましめ** 繩にて縛ること。**あらけなき** 手荒きこと。**のらくし**云々 以下、音無天神の神霊、神子に乗りうつりての託宣なり。**下人** 身分の卑しき者。巻絹を持参せし男を指す。**昨日** もはや夜中なれば晝の間の事を昨日といふ。源氏供養に「其面影はきのふ見し」とあるも同じ用法なり。**納受あれば** 納受は受領納取。下人の手向けし和歌を神慮に納受ありければの意。**三熱の**云々 龍には三種の熱悩ありといふ印度の傳説より神にも三熱の苦みあるものとし、手向けし歌の功徳によりてその熱悩少し涼しくなり、其苦みを免れたりとなり。一休水鏡に「神に三熱の苦ありといふことも、衆生は鈍根にして貪瞋痴の三の咎あり、之によりて地獄に落つるを歎き給ふをいふなり」。**人倫心なし** 出典あるによるべし。未だ見出でず。人倫は人間。其下人にはさる慚りの心なしとの意か。又は人間本来悪心無しの意か。**解けとこそ** 縛めたる縄を解けと命ずるなり。こゝは語勢を強むる爲の助辭。**解けや手櫛の**云々 手にて縄を解けを手櫛にかけ、手櫛にて解くより乱髪を梳し、更に髪を神との同音を重ぬ。**神は受けずや** 神は和歌の手向を受けずやあるべき、受けたればこそ此難を救ふぞとの意。**御注連の縄の**云々 神前の御注連の縄に掛け、しめたる縄を引き解く意に寄せて引き立てといふ。引きは縄の縁語。引き立ては引き起すこと。**此手** 下人の手。**岩代の松の**云々 心強くもゆふ(結ぶ意)を岩代に掛く。岩代の松は紀伊日高郡岩代村の千里濱の海岸にある一老松。古来結びの松と称して名高ければこゝに引き、次句に結びしと言はん序とす。萬葉集に「いはしろの濱松が枝を引きむすびまさきくあらば又帰り見む」。**何とか結びし** いかで斯く繋くは結びしの意。**音無にかつさきそむる**云々 僧無住の沙石集巻五の下に此歌の出處と覚しきものあり。後嵯峨法皇熊野に詣で給ひし時、本宮の音無川に梅の花の盛なるを見て、伊勢の國の下人の中に「音無に咲きそめにける梅の花にほはざりせばいかで知らまし」といふ歌をよみし者あり。法皇御下向の後に此事を聞しめし、御感のあまり召し出されて勧賞ありきと審に記したり。此法皇の熊野御詣は増鏡によるに建長五年の神無月なれば冬梅云々もこゝに出でたるにや。或はこのこと後年の口碑に此曲に作られたる如く傳へられしものか。歌の意は音無の地名を音の無き意に取りなし、音も立てずして

咲きそめたる梅花なれば若し白ゐなりせばいかでか人に知られんとなり。かつ咲くとは今やうく〜咲きそめたる意。**正直捨方便の誓**　法華経方便品の語こゝには「神は正直の頭に宿る」といへる俗諺の如く、神は正直を守ると云ふ程の意に用ひ、曇りなき神心、直ぐなる故にと後く。**心中に隠し歌も**　云〜心に秘して人に知らせざりし歌も神の不思議力によりて知り得たればとの意。**疑ひのあだ心**　いたづらなる疑心。**打ち解け**　こゝには疑心の解くらと共に得たる解きての意。**神は人の**　云〜東大寺八幡の誤宮に「神と言ふものは人のいつき祝ひ祭りたる神徳は現すものぞ」云く。**總持の義**　總持は梵語陀羅尼の譯語。佛菩薩の禪定より發する秘密の言句にて、此言句には無量の意義功徳を持すをを動かし鬼神を感ぜしめ天下を治め楽しきせに通ふことを得しむる德ありとかや。佛者は和歌を以て日本の陀羅尼とするが故に、和歌には天地を動かし鬼神を感ぜしめ天下を治め楽しきせに通ふことを得しむる德ありとかや。**詞少うして**　云〜和歌は僅に三十一字なれども其中には多くの理義を含蓄すとかや。**三難耳絶えて**　地獄餓鬼畜生の三惡道の苦難の如きは絶えて耳にせず。**寂然閑静の床**　云〜静かに禪定の床に觀念を凝らせば妄念の眠全く醒むとの意。**本有の霊光**　云〜自己心中に本来具有する所の霊光は忽ち光を放ち、自性清淨の月澄みて、之を蔽ふ浮雲は自ら消滅すとかや。**天を得れば**　云〜一首の和歌を詠ずるにも、よく〜天の心に通ずれば虚空の清淨なるが如く、地の心を得れば國土安寧なるが如くなるべし。老子に「天得一以清、地得一以寧」。**唯有一實相、唯一金剛**　句の出處明なるもの。字宙間の森羅萬象は悉く是れ唯一の眞如實相の法にして、且つ永堅固に、破壞することなく、能く一切に無礙なりとの謂。**天竺二**　印度。**波羅門僧正**　云〜もと迦毘羅衛國の人、文殊菩薩を師とし、聖武天皇に奏して難波津に之を迎へ、相共に和歌を贈答し談笑すること舊知の如く、天平勝寶元年東大寺の大佛成りし時、その開眼導師となり、同三年僧正に任ぜられしかば世に婆羅門僧正の名歌「仰見羅衛に共に契りしかひありて文殊の御顔相見つるかな」とあり。延暦寺戒壇院、太平記、その他諸書にいでたり。**行基菩薩**　和泉の人、法相宗の大德、諸國を遊化し、到る處寺院を創立し、或は池川を開き、橋梁を架すること等の功少からず、殊に東大寺の造立國分寺の制設なりを盡せり。聖武天皇特に尊信せられ、天平廿一年大菩薩の號を賜ふ。同年八十二歳にて寂す。**霊山**　霊鷲山の略。中印度にあり釋迦の説法せし處。**眞如朽ちせず**　眞に連はずして朽ちせずといふ程の意。**迦毘羅衛**　中印度の一國名釋迦誕生の地。

文殊の御顔　行基を文殊菩薩の化身とし、ていへるなり。**佛佛を顯す**　云〜行基、婆羅門、共に皆釋迦霊山の説法を聽きし者にて、同じく佛の化身なりとの意。**神は出雲云八重垣**　云〜國たそ稲田姫を娶り給ひし時、雲の四方に立つを見て「八雲立つ出雲八重垣妻籠に八重垣作る其八重垣を」の御詠ありしを引く。**片そぎの**　云〜新古今集に出でたる住吉明神の御詠「夜や寒き衣や薄き片そぎの行きてあひの河より霜や置くらん」を指す。片そぎは神社の屋根に交叉せる千木の端をそぎたるをいふ原歌の寒き夜を世のためしに掛けなり。**言はずとも**　云〜今更喜々しく言はずとも誰も侍へ聞き居るなるべしとなり。**神のしめゆふ**　云〜解けと思ふ由を表とし、和歌の德によりて下人の掃庭常然解かるべきなりとの意を含む。神の故事より神の注連縄にて圍ひたる糸櫻の花の蕾を風の吹きすべしめは神慮を慰め奉る意。此方優れり。**祝詞**　神に申上ぐる詞。**神を上げ**　云〜神子に乗移れる神霊を注連に詞を移し、結ぶの縁にて糸櫻を出す。なり。元禄以前の本には「神をすべしめ」とあり。**法性國**　斯かる用語未だ見ず佛德を備へたる國の意にや。**金剛山の霊光**　云〜須弥山及び須弥四洲を周繞する鉄圍山を又金剛圍山とし、十五里の山岳をいふ。其中山上嶽を大峯與の説と称す。**御山嶽**　吉野山の鳥峯といふ。諸説には大峯と金峯と同じものとせり。**金剛界の曼荼羅、胎藏界**　曼荼羅は梵語輪圓具足と訳せり。一切諸法悉く圓滿具備し缺くることなきの謂なり。又轉に就いては壇と譯し、方圓の土壇を築きて佛尊を安置し之を祭供して曼荼羅とかせり。眞言宗にては理と智との二方面より胎藏金剛両部の曼荼羅を立て、両部二而不二なりとし両界の曼荼羅を圓画し種々の修法をなす。灌頂を行ふ。これに基き、山嶽を崇拝する修験道(山伏道)の祖師により御嶽を金剛界に配し、吉野を胎藏界に配しいへるなり。**華藏世界**　蓮華藏世界の略。釋迦如来の眞身、毘盧舎那佛の淨土の名。これを亦御嶽に配す。**密嚴淨土**　大日如来の淨土。熊野を亦之に配していふ。**祝詞の神子物狂**　祝詞を上ぐる神子に神霊のうつり物狂て或に狂乱の如くなりたるをいふ。**祕行**　旧本「飛行」とあれども假に文字を改む。神秘なる動作の謂なるべし。原諸明ならず。**證誠殿**　中世僧徒の神事を管りし時代に熊野本宮の佛號を證誠大菩薩と称し、此菩薩を奉安する御殿なれば本宮を證

誠殿と呼びたり。證誠の名は阿弥陀経より出でたるものにて其本地は即ち阿弥陀如来なり。諸神本懐集に「熊野三所権現の證誠殿は阿弥陀如来の垂跡なり、西の御前は千手観音なり、中の御前は薬師如来なり、三尊寸光を並べ、契を結び て跡を垂れ給ふ」とあり。**十悪** 佛の戒めたる十種の悪行、殺生、偸盗、邪婬、妄語、綺語、悪口、両舌、貪欲、瞋恚、邪見をいふ。**五逆** 佛の戒めたる五種の逆罪、父を殺し、母を殺し、阿羅漢を殺し、佛身より血を出し、和合僧を破るをいふ。こゝには此の如き十悪五逆の大罪人も阿弥陀佛は救済したまふとなり。**中の御前** 第二殿中御前。建玉男神の本地を薬師如来とすること、證誠殿の解に引きたる諸神本懐集所載の如し。但、元禄以前の謡本、及び音阿弥の書と傳へたる巻絹には「中のコンセン」とあり。古くは「コンセン」と読へりと見ゆ。コンセンは金仙の字にて佛の謂なり。**二世** 現世と来世と。**一萬文殊、十萬普賢** 十二所権現中の第九、一萬宮は文殊、十萬宮は普賢を本地とせり。文殊菩薩は清涼山に其眷属諸菩薩衆一萬人と俱なりと華厳経に見えたれども、十萬普賢は十萬の普賢菩薩の意か、出典明ならず。或は普賢は十大願あらせられいへるにや。詳し。諸神本懐集に「一萬の宮は大聖文殊師利菩薩なり。三世諸佛の覺母、教導九代の祖師なり。十萬の宮は普賢菩薩なり」云々。三世覺母は心地観経に「三世覺母妙吉祥」とありて、妙吉祥は文殊師利に同じ。茲には二世三世、一萬十萬と数字を重ねて文の綾とせり。**満山護法** 熊野の全山悉く佛法守護の神たりとの意。**かくたよさき** 神子。**つくしがみ云々** 神璽の神子につくをつくも髪に掛かれ乱れてつくもといふる海藻に似たるをいふ詞。こゝには神子の髪を振り乱したるに喩へていひ、髪を神に通はせて御幣と後く。以下神子の狂乱と、御幣をその他の異変あることは曽我物語にも「晴明礼拝恭敬して珠数さらく〜と押し揉み、上は梵天帝釈（中略）八大龍王まで勧請して祭文に及びければ、半王のあたらと見えていろ〜のさんせ祭り、或は空に舞ひ上りて舞ひ遊び、或は壇上ををどり廻る」なども出でたるもあり。**飛ぶ鳥** 熊野の摂社に飛鳥社あり。その名を借りて狂れるにや。**拳足下足** 維摩経に「拳足下足遍満」とあり。起居動作をいふ慣用語。それを借りてこゝには足を拳げ足を下げて舞ふ意にとりなす。**又本性に云々** もとの神子の正躰に帰れりとなり。

四番目
畧脇能
畧三番

巻絹

十二月

シツレ　男
ワキ　神子
朝臣

早付

抑これ皇尊の仕へ奉る臣下なり。偖も我ら君あらたなる霊夢を蒙り給ひ。千疋の巻絹を。三熊野に納め申せとの宣旨を任せ。國々より巻絹を集めん。さる間都より参るべき巻絹遅なりん。参りてはやく神前に納めばやと存ぜ

ワレ次第上

今を始の旅衣。今を始の旅衣紀の路
よいざや急がん　都の手ぶりあり
そも。旅心の安からぬべきか。殊更これい
まだ土の命。重荷をかくる南の國。海く
だり遠き千里の濱邊。山い岩路の
さかしきを。いつかい越えん。旅の道。休らふ
間も無き。心かな　とれそも君の

上歌

恵よりも。濃れば　麻裳よい。紀の
国越えて遠ぐて。紀の国越えて遠ぐと。
山又山をそこそこも分けつ行けばとれ
そこの。今ぞ始めて三熊野の古山よ
早く著きよけりち山よ早くつきよけり
急ぎ程よ。三熊野よ著きてい。まづ
まづ音無の天神へ参らでやと思ひい。

や。冬梅の匂の聞えは。いづくよりかいらん。
げにこれなる梅にては。此梅を見て何と
なく思ひ連れては。南無天満天神。心中
の願をかなへて給へと　地神
祈りの言の葉を。心のうちに手向け
つ。急ぎ参りてまづ君に仕へ申さん
いそぐ　いざ楽内申は。都より巻絹を持て

参りては　口説　何とて遅なりたるぞ。
其為に日数を定め参るなれば。汝一人
おろかなる　地上歌　其身の科ばかりにと。
其身の科ばかりにとやとて縛めあら
けなき苦みを見せてまのあたり。罪の
報を知らせけり罪の報を知らせけり
のうのうその下人をば何とて縛め給

者なれども

ふぞ。其者いきの音無の天神とて。一首の歌をよみわれば手向け者なれば。納受あれば神慮。少し涼しき三熱の苦みを免るそれのみか人倫心あり。其繩解けとて。

●小話

地上

解けや手櫛の乱髪

太鼓頭

解けや手櫛の乱髪

打込打返

ちぎれ連の繩のしきりきて解かんと此手を見れば。心強くも。岩代の松の。何ぞ結び。

打上

これいさて何と申したる事なれども此者は音無の天神とて。一首の歌をよみわれば手向け者なれば。

者なれども

よ手向け者なれば。くく繩を解き給へ

これは不思議なる事を承りいものかな。かほど賤しき者の歌など

詠むべき事思ひもよらぬ。いうさまよも
疑ひ〜き神慮かと存じよ　猶も
神慮を偽とや。さあらば彼の者きの
われよ手向けし言の葉の。上の句を
われよ向ひ給へ。われ又下の句をば續
くべし　此上とかく申まよ及ばぬ。
いうよ汝眞よ歌をよみたらば。其上の

偽くべし

句を申さべし　今は憚り申まよ及
ばぬ。彼の音無の山陰よ。さも美しき
梅の色。殊ちりしを何とかく心も
深みてかくばかり。音無よ咲きそ
むる梅の花　句をざりせばだれか
知るべきと。詠みしに疑ひなきものを
本より正直捨方便の拙言。曇らぬ神心。

地上

納受

まぐるる故よかくぞかり。納受あれぞ
今はや疑を給へ給へ歌人を。宥させ
給へ。またハ心中ハ隠し歌も。神の
通力と知るあれぞ。げに疑ひのあだ心。
打ち解けこの縄をそくゆる給
へや　それ神ハ人の敬ふよりて
威をます。人ハ神の加護よりより

シテサシ上

●サシクセ謡外

●仕舞

れば楽むせよ達ふ事。これ惣持の
義よりより　地　詞をくるして理を
含み三業耳絶えて寂然閑静の床
のよハ眠。遥ふ眼を去る　打切ヤ　これ
よりて本有の霊光忽ちに照し自性
の月。漸く雲をさまれり。首を誦ぜ
れば。よろづの悪念を遠ざかり天を

得れば青く地を得れば安しあらか
じめ。唯有一實相唯一金剛とハ說か
ぎや。されば天竺の婆羅門僧
ハ。行基菩薩の片手を取り。靈山の。
釋迦の古もとよ契りて眞如打ち
せぞあひ見つと詠歌あれば返歌よ。
伽毘羅衛より契り事のかひありて。
文殊の古顏を。拜むありと夏よ。ほとけ
ほとけを顯まも和歌の德よあらぎや
又神ハ出雲ハ重垣かたそぎのさむき
せのためしいとぞも傳へ聞きつ
べし。神の古めゆゑ糸櫻の風の解け
そぞ思さる。さあらば祝詞を糸ら
せられゆひて。神を上げ申されゆく

シテ上 ツヨクノット 謹ゞ上再拝

中 抑當山は法性國の華。金剛山の霊光。此地よ飛んで霊地
地上 されど
なり。今の大峯これなり
地 密嚴淨土。
世界。熊野は胎蔵界
シテ 華蔵
世界の曼陀羅
地上 又八 ビヨウ
ありがたや
神樂 ヨウク
打上打返(中ノ中)
不思議や祝詞の神子
打上打返(中ノ中)
物狂。不思議や祝詞の神子物狂のさも

あらたなる。秘經を出して。神がたり
シテ 立廻 打上拍子(中ノ中) 誓誠殿は。
地柏子 護法ヲ
地上 地上
まることを。恐ろしけれ
地上 地上
阿弥陀如来 十悪をみちびき(中ノ中)
シテ 地上
五逆を懺む 中の御前は(中ノ中) 薬師
地上 地上
如来 薬とあつて 二世を助く
地 シテ
萬文殊 三世の賢母たり 十萬
シテ 地
普賢 滿山護法(中ノ中) 數この神ぐ

千のかんぎょ。つくも髪の。虚鬱も
乱れて。空よ飛ぶ鳥の。翔り翔りて地
よよ躍り。珠数を揉み袖を振り。撃
足下足の。舞の手をつくし。とれまで
ありや。神はあがらせ給へと云ひもつる。
静
聲のうちより狂ひめて。本性もぞ。
ありよける。

花月

解題 七歳にして天狗にとられ諸国を廻り居たる花月、清水寺の麓下にて父と邂逅することを作れり。能作書には花月、禅風習道目録には果月とあり。世阿弥の作と陳ふ。

謡ひ方梗概 禅味を帯びたる曲なれども、少年を題材としたるものなれば、喝食物のうちにても取り分きさらりと淀みなく謡ふべきなり。**シテ** 傍にも詳す俗にも詳る少年、禅道に心を寄する程の心にて全体さらりとあるべし。まつ出の詞は此心得にてすら〳〵と事もなく扱ひ、「偖くあのゆはと云々を作り、「今は天の「大」を抑へて心」、「人これを聞いて」とたゝかに地に返す。小歌の一句は静に丁寧なるべし。「鶯の花踏み散らす」以下の詞は、句をれぐ〳〵の趣を写し、「あらおもしろやは引きたてゝかくつて強ふ。「やすき事」云々とは改めて素直に出、**サシ**はすらりと扱ふ。クセの上端は唯りと、「七つの年天狗にはかゝつて天きやかに地に返す。**ワキ** 通常のワキ僧の住にてなすべし。但、運びはさらりと淀みなきを宜しとす。「それは祈これは陽」云々は引き立てゝ調子よく承け、さらりと猶軽やかにこいでもの見せん鶯」と一旦鎮め、打切後の「てもの見せん」より直を来せて強ひ込み、続の句にて納むる心なるべし。**ツレ**はシテを承けてさらりと、**クセ**は猶静めに出、流らぬやう強ひゆく。上端後は甲グリ以下一体に引き立てゝ同じく続にて鎮む。「とられて行き」は氣合を外さぬやう兼つて附け、二度目の「とられて」を氣を更へて少し静に出、「さて京近き」ようさらりとなり、「かやうに心乱れて」と氣をかけ、「今より」云々以下は軽妙の長びを含みて世塵を離れたる心に強ひ納むべし。

注意すべき謡ひ方 小歌の一節は節付も通常の處と異なれば、呂音に表すところなど、それ〳〵強ひ抑せぬやう心すべく、「くせものかな」の「か」の春一節は「ものまで」を中音、「か」の頭を下音に出、撥子と共に一度中音に浮かせ、「な」にて亦下音に落す。二度目の「さらく」の「さら」の二音は他に例なき強ひ方にて会ひ方との関係上「ぞ」の音を引きて強ふものなれば、善く所作を変くべし。

解釈 **風に任する** 風のさそふにまかする浮雲の如く、定めなきさま。**巽山** 英彦山ともいふ。豊前豊後筑前の三国に跨る大山。古来俗に天狗の住める處と傳せられ、中世以降山伏の行場となり、所験道彦山派の本山(今豊前国田川郡に属す)たり。**俗** 僧に対して一般の俗門に入らざる人をいふ。**出離の縁** 生死の迷界を脱るゝ縁。**生れぬ先の** 以下の一節幸都幸小町と同文なり。

一切衆生は本覚眞如の覺体より無明の為に違ひ出でゝ者なれば、一度未生以前の本覺眞体を證悟すれば法界一相平等無差別にして、隈に現在の一世に假の契を結べる親子の恩愛の如きは見るに足らずとの意。

千里を云々　親子恩愛の執着なければ千里の遠きに行くも敢て遠しと思はず、山野に起臥するも我家に異ならず、之こそ眞の終住みかなれとの意。佛家に所謂「三衣一鉢樹下石上」の心を展べ

たるなり。

清水　清水寺を指す。京都東山清水坂の上にあり。此寺の地主の

花月　作者叡作の名。月は

常住　以下、花月が己の名を人に問はれて、月字より先づ解きて答へゝなり。月字は即ち四季を通して常に在る月端なれば、常住にして眞如の理體を意味すること、事々しく言ふに及ばずとなり。

くわの字は云々　月字は言ふをまたず、況くあの字は、クワと發音するもの、春ならば花、夏なら

ば瓜、秋ならば菓、冬ならば火の何れにても差一からず、解する者の解に任ずべし。唯、宇宙を支配する絶對の法則たる因果の果字も同じくクワの音なれど、

これは末後の一句に残す一道くゝ一となり。禪味を含みて戯れ答へ一作意なり。

因果の果字を末後の一句に残すとなり。末後に巖頭と德山との末後の句の問答見え、其後に識得最初句、使盡末後句、末後與最初、不是者一句。

末世のかうそ　「末世の高僧を約めて猛へるなるべし。末世は釋迦入滅後、正法時五百年、像法時一千年を既に過ぎたる末法時の謂。教法は存すれども修行者無く證果を得る者絶無なる佛法衰微の世。

雲居寺　京都東山にあり。今の高臺寺の地。

花に心を云々　花に心の引かるゝと引くゝ弓にかけ、弓の縁語を持てるに掛けて強く。花月弓矢

を持てるに掛けてこゝに弓を出す。

こゝかたより云々　以下の一節を小敬とい

ふ。當時行はれし通り惜はくせしの、忘しき時は更に寢られずとの意なり。「更に」

とゝさらくと言ひ重ねたるは俗調を学びたるものなるべし。

國　支那。

養由　養由基。今昔物語、源平盛衰記、蒙求等に養由とあり。支那の春秋時代

に射術に長けたる人。百歩離れて柳の葉を射るに百發百中せりといふ。

は柳云々　養由基の射しは柳、花月の射るは楊、又彼は雁、此は鳥を射んとするなりとの意。養田基

の雁を射しことは、源平盛衰記に「養由弓をとれば雁列を乱り、飛鳥忽に地に墜つる勢あり

きと云々。

ふんぬいで　踏み脱ぎて

大口のそば　大口袴の端。大口袴は古代の下袴の一種にて、其裾の口廣くして大きければいふ。

狩衣　もと鷹狩の時に用ひ、後に式服となりし服。

うつ肩ぬいで　打ち肩脱ぎての音便。衣の肩を脱ぎて身軽になる意。

よつびきこびやう　よく引きしぼり、ひやうと弦音をさせて矢を放つをいふ。

殺生戒　すべて動物の生命を害するを殺生といひ、佛教にては悪業に属する悪行として之を禁ず。殺生戒と名づけて五戒十戒の第一に置く。

語通断　言語にて形容し得ざるを言ふ。瑜珈經に「一切言語道断、心行處滅」

曲舞　足利時代に行はれし一種の歌舞。

一節　ひとくさりといふに同じ。

れば云々　以下「影清」まで田村と同文なり。寶生流に此一節無き

にや　は觀世流の五田村より借り来りたる後世の入れ句にや。

大慈大悲云々　觀音の功德を讃歎したる今様調の道歌なり。觀音は大慈悲を以て十悪の衆生を濟度せんが為に

五濁の末世に現はれ給ふとの意。慈悲を村里に匂ふ春の花に譬へ、化身を濁水に映る月に喩ふ。十悪は

佛教にていふ十種の悪行。五濁は同じく五種の心の汚れ。

此寺　清水寺をさす。

坂上田村丸　正しくは田村麻呂。征夷大將軍となりて東夷の叛亂を平定せし武將。清水寺は田村麻呂の地を賜りて創建せしことゝ

田村に作らる。

大同　平城天皇の時の年號。清水寺の創建は帝王編年記には延暦十五年。扶桑略記、元亨釋書には延暦十七年。東寶記には「田村麻呂延暦廿四年蒙官符、賜山地、建立私寺」とあり。又緣起には「寶龜十二年初建立、延暦十七年更造大佛殿、大同二年又造伽藍」とあれば、大同二年は伽藍造立の時なるを、こゝには草創と作れり。

青羽山　今、清水寺のある山。但しこゝに作れる觀音の奇特は達坂山の南なる青羽山、即ち半産山にて

こんゞゆせん　金色泉（こんせん）の誤なるべし。扶桑略記には「金色一筋の流」などあり。

木　名のみ青柳といへど實は緑の色もなき柳の枯木との意。

楊柳觀音　右手に楊柳枝を執りて手を乳の上に當て掌を顯せる像の觀世音。千光眼祕密法經に「若欲消除身上衆病、當修楊柳枝菩薩」とあるに基く。

御所變　「御所現の姿」なるべし。

千手の拍子云々　千手觀音の誓願。千手は觀音の大慈悲の無量無邊なるを具體的に表現したるものなり。

枯れたる木云々　千手陀羅尼經に「乾大神呪呪乾枯樹、尚得生枝柯華果」云々。梁塵秘抄に「よろづの佛の願よりも、千手の誓は頼もしや、枯れたる草木も忽に、花咲き實成ると說い後ふ。

八撥　撥數と稱する一種の數を八拍子に打つ打ち方の名。

天狗　深山に棲みて人と言ふ想像上の怪物。時代によりて想像せられたる

形状異れども、中古には古き鷲の如き面をなし、肩に羽翼を有し、多くは山伏の姿を能ひて時に人をさらひ空高く飛び行くものとせられたり。**先づ筑紫には**云々 以下天狗に連れられて経廻りし山々の名を挙ぐ。**彦の山** 前に注せる彦山。**四王寺** 深き恩をすると四王寺に掛く 筑前國筑紫郡なる大野山(一に大城山)を四王寺(四王院、大野山寺とも)あるを以て四王寺山とも稱ふ。**松山、白峯** 讃岐國綾歌郡にあり、松山の高峯を白峯といふ。此山にある白峯寺には南海六國國天狗の司と稱する相撲坊を祭れる一堂あり。又崩崖天狗にならせ給ひきと傳ふる崇徳上皇の御陵も此寺域にあり。**大山** 伯耆國の中央に挺立する山陰道の最高峰なり。修験行者は古来之を熊野金峰に比せる靈場とせり。**鬼が城** 備後國童子の住みたりといふ大江山のことなり。山中に鬼洞ともいふ岩洞ありて俗に鬼神の棲みし處と傳ふ。山頂南方は丹波國に、北方は丹後國に屬せり。**愛宕の山の太郎坊** 愛宕山は山城國葛野郡にあり。修験道にて靈場とせる七高山の一。源平盛衰記に「神本記傳正(真濟)は日本第一の天狗と成て愛宕山の太郎坊と申也」。**比良のの峯** 比良の峯と、ふべきを口惜の上より「の」字を重ぬ。旧本平野とせるは誤なり。比良の峯は近江國滋賀郡にありて、これも修験道七高山の一とす。**比叡の大嶽** 近江山城の二國に跨る比叡山。これも修験道七高山の一なり。其絶頂を大嶽、又は大比叡峯ともいふ。延暦寺の中堂は此大嶽の東傍にあり。**横川** 月の夜を横川に掛く。比叡の大嶽と一脈谷を隔てゝ其東北に横亘するを横川嶺といふ。**日頃はよそにのみ** 云々 新古今集の歌「よそにのみ見てやゆみなん葛城や高間の山の峯の白雲」を取りて駿と す。**葛城や高間の山** 葛城の高間の山の意。葛城山は大和國西界の峻嶺にして其高峯は南葛城郡に於て高間(又高天に作る)山、一名金剛山となる。役の行者の修行せし山にして所謂七高山の随一とす。**山上、大峯、釋迦が嶽** 大峯は大和國吉野金峰の南より玉置山に至る約十五里をいふ。修験道にては靈地として最も尊崇し、此山に登攀すると峯入と称して山伏修行の一法となす。山上嶽は大峯の奥の院 正しくは「センジョウダケ」と読む。弦曲にても古くは「センジョオ」と読ひしなるべし。釋迦嶽も亦大峯中の一峯なり。**さてら** 竹の先を刺りて作り、磨り合せて歌の拍子を取るに用ふるもの。**あの僧** 父なる僧をさす。**さつと捨て** てこには浮世をさつと思ひ捨つる意。さらら、さつと、さ様は、、、いづれも「さ」の韻を重ねて綾とす。

四番目
畧二番

花月

二月 シテ花月 ワキ旅僧 狂言 清水門前ノ者

ヨワク 平次茅上

風よ任せる浮雲の風よ任せる浮雲

のとまりいづくあるらん　これ筑

紫彦山の麓よ住まひまする僧なれば。

われ俗なれども時を一人もちて

いと。七歳と申しし春の頃。いづくとも

なく失ひて侍程よ。これを生離の縁と

思ひ。かうの姿となりて諸國を修行
仕る（道行上）生れぬさきの身を知れば。生
れぬさきの身を知れば。憐むべき親
もなし。親のなければ。我が為よ。心を
とむる子もなし。千里を行くも遠か
らず。野よ山よとまる身のこれ
ぞ眞のまみかなることこれぞ眞のまみか
なる　急ぎの程よ。これはや花の都
よ著きてゆ。まづ承り及びたる清水よ
参り。花をも眺めばやと思ひ（狂言）宮め
て今日の清水へ詣参りあるき事にある
まじ。所供申し彼の人よ見せ申ば
べし。（シテ）抑これは花月と申す者なり。
ある人我が名を尋ねよ答へて曰く。

月ハ常住ノ物ニテハ及ビモ。備ハ
の字ハと同ヘ。春ハ花。夏ハ瓜。秋ハ果
冬ハ火。国果の果をば。末後まで。一句の
たゝよ。殘まてといへ。くどくどしを聞て

地拍子　末世のかうそなり

地上　さてハ末世のかうそなりとて天下より
隠れもなき花月とわれを申さるゝ

狂言　△何とて今までハ遅く参じたぞ▽

シテ　さんぬ今までハ雲居寺よりひしゝ。
花よ心をゝくらの。春の遊の友だちと。
中違をゝとて参りたり

狂言　△さらばいつ
ものゝ如く小歌を調ひて御遊びいへ▽

シテ　●来り方より

地中ノリ　今のせまでも絶えぬ
ぬものハ。恋といへるくせもの。げに恋ハ
くせものかな。身ハさらく、

地拍子　今の世
地拍子　他えせぬ
地拍子　げに恋ハ
地拍子　身ハさらく

●小謡

地搭子
さらみ、こ、こ
寝られね

さら。さら〳〵さらつよ寝ぞそ寝られね。

狂言 あれ程賞ゆへ鶯ぐ花を散らしゆよ。

シテ げよ〳〵鶯ぐ花を散らしゆよ。某射

て落しゆそん

狂言 急いで遊ぎしゆへ。

シテ 鶯の花踏み散らす。細脛を大薙刀も

あらぢそそ。花月ぐ身よかたきの無け

れば。だち刀ハ持たぎ。ろハ的射んぐ為。又

かる落花狼藉のぶ鳥をも。射て落

さんぐ為ぞかー。異國の養由ハ百歩よ

柳の葉をたれ百よ百矢を射るよ外

さぞ。われハ又花の梢の鶯を。射て落

さんと思ふ心ハ。其養由よも劣るまー。

地上 あらおもしろや。それハ柳とそれハ櫻。

それハ雁がねとそれハ鶯。それハ養由

とれい花ぶ。名ごりをかなしむ。弓よ隔ハ
よもあらじ。いでものの見せん鶯。いで
もの見せん鶯とて。履いたる足駄を
踏ん脱いで大口のそばを高く取り狩
衣の袖をうつ肩ぬいで。花の末蔭よ
狙ひ寄つて。よつぴきひようと。射ずや
と思へども。佛の戒め給へ殺生戒をば

破るまじ。と語道断おもしろき
事を仰せられぬ。また人の所望よ
て。當寺のいにしへを曲舞よ作りて
所謂ひようを面しめて。一節所
謂ひようへその所望とて。やまき
事謡うて。面白せ申さうぞとて。
サシ上
●獨吟サンクセ
さうれぞ上や。大悲大悲の春の花

●仕舞

地 ず悪の里よりずゝ〻く。三十三身の秋の月。五濁の水よりも影清し。抑この寺八坂上の田村丸。大同二年の春の頃。草創ありしこの方。今も音羽山嶺の下枝の滴りよ。濁るもなき清水の。流を誰か汲まざらん。ある時此瀧の水。五色に見えて落ちければ。それを怪

しめ山よりの。其水上を尋ぬるに。しゆせんの岩の洞の。水の流に埋れて。名に青柳の打木あり。其木より光さし。異香四方に薫まれば。地 さては疑ひ所なく。地 楊柳観音の。所変にて。まのあたりかと。皆人手を合せ。猶も其奇特を知らせたべと申せば。打木の

柳は緑をなす。櫻はあらぬ老木まで。皆白妙の花咲きけり。さてこそ千手の誓ひ空しからぬ。枯れたる木も花咲くと人の申しもあらず。思議や。

これなる花月をよくく見るべし。某が俗にて失ひし子にていいうよ。その者にて逢ひたやと思ひいる。いうの花月よ申も

べき事のは何事にてはそ。申す身は何處の人にてわたりはそ。これは筑紫の者にては。さて何故やうに諸國を御廻りはそ。われ七つの年彦山に登りはひしに天狗に取られてやうに諸國を廻りは。さて御尋ねは所も有。これにて父の左衛門に見

わまれてあるか　（狂言）△のうくゝ所僧ハ
何事を仰せられいぞ△　（ロキ）さんぼこの
花月ハ某ゞ俗にて失ひ〻なきてい程よ。
さてゞやうよ申いは　（狂言）△まぢかき事を
承りいな。まづくゝそなたへ所のきいへ。
いろよ花月へ申いな。いろものやうよハ撥
ちを所打ちひひて皆人よ所見せいへ△

●仕舞

（シテ）さてもわれ紫雲山よ登り。（上）七つの
年天狗よ　（地）とられて行き〻山とを。
思ひやることそ悲しけれ　（中）（鞨鼓打上（謡曲））取られ
て行き〻山とを。思ひやることそ悲し
けれ。まづ紫雲よハ彦の山。集き思を
四ま寺。讃岐よハ松山降り積む雪の
白峯。さて伯耆よハ大山さて伯者よ

へ大山。丹後丹波の境なる鬼ヶ城と。
聞きしに天狗よりも恐ろしや。さて京
近き山々さて京近き山々。愛宕の山
の太郎坊。比良の次郎坊。名
高きは嶽の大嶽よ。少し心のきみ
しとて。月の横川の流れ。日頃よそ
よのみ。見てや止みぬと眺めよ。葛

城や。高間の山。山上大峯釋迦の嶽。
富士の高嶺よ。あがりつゝ。雲より起き
臥も時もあり。やうよ狂ひめぐりて。
心乱るゝとのさらさらさらさらと
もつて。謡ひ舞うて。數へ山々嶺々
里々をめぐりくして。あの僧よ。峯迄ひ
摩ゐ嬉しさよ。今よりとのさらさつ

と捨てさせたぶ。あれ為る所僧よつれ
糸らせて佛道つれ糸らせて佛道の
修行よ出づるぞ嬉しかりける出づる
ぞ嬉しかりける。

鍾馗

解題

鈴南山の者都に上る途次、山中に鍾馗の霊に逢ふことを作れり。されども一篇の構造を見るに中心はクセの一章にありて、此一節は全く鍾馗に関係なく、獨立したる一幅の淫ひものなり。思ふに此一段に前後を附して此曲を作りたるものなるべく、これを包含する劇的材料として鍾馗を出したるは甚以つかはし。かからぬ感あり。作者ルクセと金商とは全く別人なるべし。世阿弥の五音曲脈々に「一生は風の前の雲、夢の間に散り易し」の語、哀傷の本風也」と記し、金春禪竹の五音次第に哀傷として巻げたる「一生は云々」以下、同じく五音三曲集に本曲と同文なれども、恐らく本曲吟前に存せし短篇の淫ひものなるべきこと、五音三曲集に本曲に取り入れられざる「それ三界安きことなし」云々の十数句を前に置きたるによりて推すべし。従つて二百十番謡目録に金春禪竹作とし、熊谷作者注文に禪竹作、世阿弥作(こゝには鍾馗と書きて鐘字を誤れり、或は後人鍾字を補ひたるにや)と二箇所に出したる、共にたやすく信を置き難し。春日拝殿方諏日記に寛徳四年二月十日の翁の猿楽に金春太夫が演じたりと見ゆる鍾馗大臣の曲名は、皇帝の一名とも見らるれども、同曲には市くまより明王鏡といふ別名あれば、或は此曲を呼びたるものかとも思はれざるに非ず。

謡ひ方梗概

金剛に以たる住にて手強くさらりと扱ひ、曲折を弄することを好まず。**シテ**前は里の男の姿なれば強く住に拘泥の面影を写すべし。**哀掛**は抑へずして大きくさらり心に出、「今は何をか」云々は斜か喰りと言ひ、**舞歌**はかゝつて、「をりからに」を大きやかに喰りと謡ひて地に流す。クセの**上端**は引き立てゝすらりと、「とても見みえ一夢の中」云々はかつーりと、「けゝき変りて」を強みに喰りと、面目一変の心を以て謡ひ止む。**輪**は鍾馗の本體を現すなれば十分に強く、荒く流れぬを良として、猛烈一き程に地張なく扱ふべし。**地**は軽々しくならぬやう注意し、喰りはきゝにて「鬼神に魂道なし」と強ひ出し、**ロンワキ**男聚なれども軽々しくならぬやう注意し、喰りはきゝ者に入りて手強く健やかに承け渡す。**ロンギ**と謡ふが宜し。「これは不思議の御事かな」、此詞は特に喰りと扱ふ。**地**初の**上歌**は物しとやかに聲を吏へて出で、**少也**は世の無常を作れるものなれども、せして心持を附けず、前に続けてさらりとしたる味はひに謡ふ。「待へ聞く佛在世の云々は強霜来りに来りて強みにつけ、以下順次に気を加へて謡ひ行き、中入前の返しにて鎮む。**輪**は通下てシテの気を承け、鬼神退治の壮烈なる状を謡ひ表すべし。「廊下の下」より「賓剣光すさまじく」云々は猛鋭く強ひ、**ロンギ**は気を吏へて健やかにさらりと承け渡し、「廊下の下」より断次鎮めて強ひ納む。

辭解

終南山 支那陝西省西安府（古の長安）南五十華里にあり、中南山、太乙山とも號し、又單に南山ともいふ。秦嶺山脈中の一峯なり。吉來高僧の山中に寺を構へて隱棲せるもの多かりしより、其名風に代國に傳稱せらる。

しるき 著し。

過ぐれば 古くは「過ぎくれば」と濁ひしなるべし。注本の例として「ズグレバ」と清ぶ。時は送假名「く」を有きて「過くれば」と書き、「スギクレバ」と書くが例なればなり。

よる程もなき 故の常るを夜に掛く。夜もまちかき意。

誓願の子細 子細ありて立てたる誓願。

君賢人をなし給はゞ 君賢人を登庸し給はゞの意にや。

奇瑞 不思議に、めでたきこと。

鍾馗 鍾馗のことは唐逸史を引きて事久顯聚に出でたり。唐の開元年中玄宗皇帝病床に在りし時、夢に小鬼現れて、太真（楊貴妃）の繡香囊と皇帝の玉笛とを盜まんとしければ、皇帝叱して何者なるかを問ふに、小鬼答へて虛耗（貪婪）の佩び刺繡を實ちたるが現れ、小鬼を捉へ其眼を刳き摩きて之を喰ふ。其名を問ふに、天鬼申す、臣は終南山の進士鍾馗なり、武德年中、舉（試驗）に應じて第一等、殿階に補れて死せしが、其時御恩を蒙り、緋袍（官服）と角帶（同）とを着けて葬られぬ、臣其高恩を報ぜんが爲今虛耗の妹を除きたりと、同時にその夢覺め、疾また癒え給へり。乃ち畫工吳道子をして之を描かしめ給ふ。後世鍾馗を畫きて妖魔を駆るの符となすはこれより起れるなり。

進士 支那唐の代に官吏となるべき試驗に及第せしもの。試驗には秀才、明經、俊士、進士の四種ありしうち、詩賦を以てするものにて、最も貴しとせられしは進士の試驗なり。鍾馗は進士の試驗に落第せしなれば、こゝに及第のみぎんと云へるは、實際の試驗に非ずして、陳花を授けられしをさすものなり。鍾馗死後、綠花を賜はりて及第の恐れを受けたる除、自殺するに至りし執着の念を改めて善に向ひたりとなり。みぎんは珈の音便にて、物事の除。

及第のみぎん

亡心 無心。

草虫露に 以下月前の風景に寄せて人生の無常を述ぶ。聲しきりの意。蟲りとは、ふと夕暮にかゝる。それは聲の弱ちを思ふ。

中々 花も紅葉もその美しき色と香ふ。

絶には添はぬ 絶には死期をいつ。

いつをいつとか 以下クセの一段は金春禪竹の五音三曲集に哀傷の歌に東るを豫定せられざるをいふ。

いつか一度は来るものと知りながら、其いつ（こゝには死期）をいつ

一生は 以下クセの一段は金春禪竹の五音三曲集に哀傷の歌に用ひ、歌に曷くは同言に

は數り易くとあれど、世阿弥の五音曲條々、及び禪竹の五音次第には妖曲に同じ。

三界は 三界とは佛說に、欲界、色界、無色界、即ち衆人の迷ひて生死輪廻する世界をいふ。此世界は水上に消えては結ぶ泡沫の如しとなり。白氏文集に「幻世如泡影」ことし、禪竹の五音次第及び五音三曲集に假名書にて「いらん殿」とあるにても知るべし。同冥記に「隆景帝改宗蘭閣」為「猗蘭殿」、後王夫人誕「武帝干秋殿」。

猗蘭殿 猗蘭は後宮の名にして「イラン」と訓ずるは後世の誤なる。これを「キラン」と訓ずるは後世の誤なる。

有為の悲 生住異滅の四相轉変窮りなきを有為といふ。假令金殿玉樓の内に樂を極むる人なりとも、有為無常の悲を免る能はずとなり。

非羽翠の帳 かはせみの羽もをもて飾れるとばり。貴人の閨に用ふ。異物志に「形如燕、赤而雄曰翡、青而雌曰翠」。

有漏の顧力 有漏にては意通ぜず。これは無漏の誤傳なり。光悅淮本（慶長）に無漏とあり。また五音次第及び五音三曲集に假名書にて「むろのゝわんりき」とあるにても知らる。無漏は煩惱の異称。無漏の願力とは煩惱の垢穢を離れ、清淨無垢の佛果を願ふ心なり。

栄華 清經に水には華といひ、草には榮といふとあり。されば草木榮茂の觀なるを、人の時めき榮ゆるに轉ト用ふ。白氏文集に「宮遠琨笑不勝怨、昨日榮華今日衰」。

わんりき 五音次第及び五音三曲集に假名書にて「ゝわんりき」とあり。奇の条に對する語なれば、もと歡樂なるべし。原歌に「たづを刺れつゝ」とあるを、「たづのねに鳴きて」と轉ぜり。たづは鶴の異名。後撰集の歌に「世の中と云ひつるものは陽炎の有るか無きかの程にぞありける」。

朝顔の 以下「咲れある」まで住者物語の長歌に依る。原歌に「たづを刺れつゝ」とあるを、「たづのねに鳴きて」と轉ぜり。たづは鶴の異名。後撰集の歌に「世の中と云ひつるものは陽炎の有るか無きかの程にぞありける」。

世を秋風 世を飽くを秋風に掛く。

しでの田長 時鳥の異名。北出の字に掛けて北出の山に住きかふ由をいひ、古来悲哀の鳥として慶賀に用ひず。こにても北出の田長の鳥く」聲は誰が冥途を知らずなんとなり。

浄藏浄眼 昌泰世に妙莊嚴といへる主あり。邪見にして佛法を信ぜず。妻子に浄藏、浄眼といへる二王子は佛法を信じ、神力を得、父王の邪見を憐愍し、父王の心を解して佛所に至り法華の利益を得しめんため、種々の奇瑞を現じて其望を遂げたること、法華經妙莊嚴王本事品に出でたること引く。

多羅樹 東印度に多き一種の高木の名。葉は梭櫚の如く果は石榴に似て樹の高さ七八十尺に及ぶ。されば古く物の高さの譬に引く。七多羅樹は多羅樹七箇の高さなり。法華經に、淨藏淨眼父王の心を解さしめん為、虛空に昇ること七多羅樹にして種々

の神変を現し、或は空中に行住坐臥し、或は身より水火を出し、或は空中に滅して忽
然として地に表れ、地に入ること水の如く、水を履むこと地の如くなどあちこに據る。山彦形は定
如くと云ひかけて詞を山彦に轉ず。山彦は谷間などにて發る反響にて、も山の
こだまともちひ、聲のみ有て實無きものなれば、以下聲ばかりなどと續く。妙經妙法蓮華經をさす。鬼神
に横道なし　鍾馗の小鬼を叱する詞。神に横しまなる不條理のこと無しとの意。驚かし
驚かしきの　建久年に、鬼神は横しま無し、怒むべからず。左傳に「神者聰明正直」。或は「おろそか」は「おご
張なるべし。寶劍光法　寶劍の光物凄まじく日月の影も及ばずとの意にや。或は「おろそか」の誤にて、寶劍の光の物凄しきこと日月の如く厳にしての意にや。
悪鬼の亂れ世　亂を成す悪鬼の體げにも鍾馗なるべし。或は正鬼などにや。一念發
起菩提心　悪心を飜す一念を一念發起菩提心に掛く。菩提即ち佛道を求むる心を起す其一念
裏雲居　芸に天子の生す宮殿。適滿　偏く行き亘ること。

金春禪竹　五音三曲集の一節　第四哀傷度物

（法華の中は本曲と異る處を挙げたるなり）

夫三界、やすきことなし、なをし火宅のごとし、悔もとき難くり、まして や我等衆生として、ことたまちひのうみふかき、雲水の世の、あわれさに、いつかうかまん、長眠のなみの、よるべいづくと、さだめ
まし（以下鍾馗のクセに同じ）一生は風の前の雲、夢の離に殺り（殺し。五音次第同様）やすく、三界は
水のうへのあは、光のまへにきえんとす、い（き）らんでんのうち（ち。五音次第同様）ゑは、有為のかなし
みをつげ、ひするの（ひするの。五音次第同様）ちやうのうちには、むろ（有漏）のく（で）わんりきこのりとか
や、常花は是、春の花、きのふはさかんなれども、けふはもとろふ、く（鼓）わんりきの、秋の光、あ一たにぞう
ー（上）ゆふべにげんすとか、春さり秋きたつて、花さんー雲をつ、時うつり、所（けーき）へんーて、たのーみすで
にさつて、かなーみはやくきたれり、あさがほの、花のうへ或、露ようも、はかなき物は、かけろふの、
あるかなきかの、こてちーて、世を秋風の、うちなびき、もれるうたづの、音をなきて、しでの田おさ
の一こころも、たがまみぢをかーらすらん、ああれなりける、人かいを、いつかは、はなれはろべき。

五番目
畧脇能

鍾馗

九月　シテ　鍾馗
ワキ　旅人

早笛
これい唐土終南山の麓よ住まひする
者にて候。さてもわれ奏聞申さべき事
のい間。唯今帝都よ赴きい。終南
山をこそ出でて。終南山をこそ出でて。
野草の露を分け行けば。遠村よ煙
満ち人屋去るき晴海の。海路遥よ

過ぐれば釣のふねも帰る浪。夜ほども
あるき。眺めるか夜ほどもあるき眺めるか
のうくあれある旅人よ申まべき事
のは何事ぞいぞ　われ昔誓願の
子細あるよりう。悪鬼をとぼ國土を
守らんとの誓あり。君賢人をあ給
ちと。宮中よ現じ奇端をあまべきとの。

あまべきとの

此事を奏してだび給へ　とれハ不思
議の御事かな。さて〳〵御身いハ
なるぞ　今ハ何をかをむべきわれハ
鐘馗といへる進士なるぞ。及第のみぎんよ
こせ。其執心を飜。後世よ猶望あり
げく鐘馗の御事ハ。世よ隠れなき
進士なるぞ。其こ心をてまりまるか

シテカゝん上

ゆうく　なりくなりとなる暮の　日　物もさまゝ

しき　シテ　ちりからよ　地上歌　草也露よ聲

ちをれ草也露よ聲ちをれ。寿ぬるよ

形なく。老松既よ風絶えて。問へども松ハ

答へぬ。げにや何ぞ事も。思ひ絶えなん

色も香も。絶よハ添やぬ花紅葉いとを

いとを。定めんいとを。定めん。

風絶えて

●小謡

●隅今

クセ　一生ハ風の前の雲。夢の間よ散し

やすく三界ハ水の上の泡ひゝの前

よ消えんとも。猗蘭殿の内よハ有為

の悲みを告げ。翡翠の帳の内よハ有

漏の願力ありとかや。紫華ハとれ春

の花。昨日ハ盛なれども。けふハ衰ふ

わんりきの。秋の光。朝よ増し。夕べよ

地拍子
秋来て。花散り葉
地拍子
時移りけりき変
減ぜぬ。春去り秋来て。花散り葉
落つ時移りけりき変じて。楽み既よ
去りて悲み早く来れり　朝顔の。
花のよるる露よりも　はかなき物い
かげろふの。ある内の心地して。せ
を秋風の打ち靡き。羅れぬるたづの
音を鳴きて去ぬの田長の一聲も。誰ぞ

よみぢを知らまほしん。あとれなりける
人界をいつかは離れはつべき。これい
不思議の御事かな。急ぎ帝都よ赴
きつつ。奏上申べし。暫らく
待たせ給へとよ　そも見みそ夢
の中。眞の姿を顕さんと　云より
早く　けしき変りて　地上　傳へ聞く佛

在世の傳へ聞く佛在世の淨藏淨眼の如くよ。其高さ七多の羅樹虛空よあがりて坐せしめ地よりて火焔を放して。水を踏む事陸地の如くよ。さらくと走りて。形はさながら山彦の形はさながら山彦の聲ぞなりして。失せよけり聲ぞなりして失せよけり

中入

早上歌

待謠

若の席よ法をのべ。若の席よ法をのべ。さもまさまさ山陰の。嵐と共よ聲立てて。此妙經を讀誦する此妙經を讀誦する

後シテ上

早笛

打上

鬼神よ横道なりと云ふよ。何ぞみだりよ騒がしく。汝知らぬや我が心。國土を守る誓あり

寶劍

光まさまさく。日月影おろそかよ。松

●仕舞

嵐捕を拂ふが如く。惡鬼の乱怒れ去
つて。げよも鐘馗の精靈たり　打上風頭打切　あり
がたの御事や。そも君道を守らんの。
其誓願の御誓。しらるる謂あるらん
シテ上
●鐘馗及第の。鐘馗及第のみぎんまで。
われてこそ惡心を。飛て一念發起
菩提心なるべー　地上　げよ眞ある誓

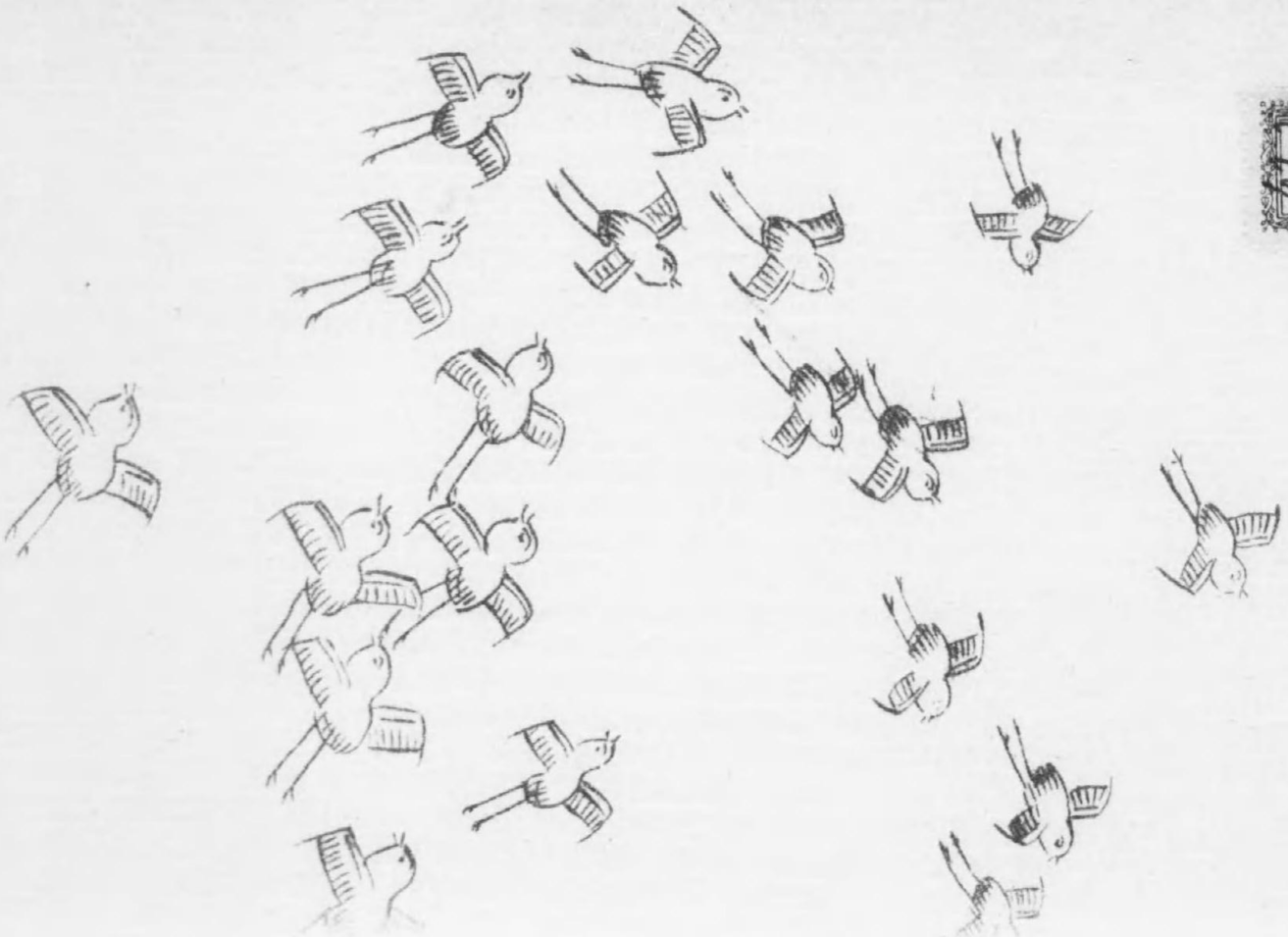
地拍子
紫のぬく

とて。國土を鎮め給きてげよ　シテ　禁裏
雲居の樓閣の　地　とやかーとよ遍
滿ー　シテ　あるひは玉殿　地　廊下の下。
古階のもてまでも。古階のもとまでも。
劒を潛めて忍び忍びよ。もとむれば樂
の如く。上ツ鬼神は通力失せ。顯れ出づれば
忽ちよぼだくよ切りはあーてやまの

あたりある。其勢唯此劒の威光とお
て。天より輝き地より遍く治まる國土と
なる事治まる國土となる事もげよ
ありがたき。誓ひ
誓ひおがげよありがたき

地柏子
國土とあるまでも。
げよありがたき。
誓ひおがみ　トモ

大正十年六月三日印刷
大正十年六月三十日發行
訂正者故　丸岡桂
相續者　丸岡明
東京市神田區今川小路三丁目九番地
發行者　土居源太郎
東京市神田區東松下町十二番地
印刷者　鈴木彌作
東京市神田區東松下町十二番地
印刷所　信英堂印刷所
東京市神田區今川小路三丁目九番地
發行所　觀世流改訂本刊行會
電話九段　二三〇五番
振替東京　一三四七五番
觀世流改訂謠本
第四版・大正版
滿洲權
所有
許可
許可



終